

非核平和都市品川宣言

2019 品川区平和使節

派遣レポート



Shinagawa City

品川区

非核平和都市品川宣言

今、この地球に、
人類は自らを滅ぼして余りある核兵器を蓄えた。
いまだかつて、開発された兵器で使われなかったものはない。
これは、歴史の恐るべき証明である。

一刻も早く、核兵器をなくさなければならない。
頭上に核の閃光がひらめく前に。
遅すぎたとき、それを悔やむだけの未来すら、
我われには残されていない。

品川区は、核兵器廃絶と恒久平和確立の悲願を込めて、
ここに非核平和都市を宣言し、全世界に訴える。
我われは、いかなる国であれ、いかなる理由であれ、
核兵器の製造、配備、持込みを認めない。
持てる国は、即時に核兵器を捨てよと。

このかけがえのない美しい地球と、
そこに住む生きとし生けるものを、守り伝えるために。

昭和 60 年 3 月 26 日

品川区



「シンボルマーク」

※平和の象徴であるハトが爆弾をくわえていってしまうことを表しており、ハトには品川の文字をデザイン化しています。

はじめに

品川区では、核兵器の廃絶と恒久平和の確立を願い、昭和 60 年 3 月 26 日に、区民の総意のもとに「非核平和都市品川宣言」を行いました。

この宣言の趣旨を一人でも多くの方々に理解していただき、戦争の悲惨さや平和の大切さについて一緒に考えていくため、品川区では様々な事業に取り組んでまいりました。

本紙における、広島・長崎への平和使節派遣事業は、宣言の趣旨を次世代に語り継いでいくことを目的として、昭和 62 年から実施していた「青少年広島の旅」を引き継ぎ、平成 15 年度から始めたものです。「品川区平和使節」と位置づけ、本年度で 17 回目を迎えました。

今回、広島へは品川区立中学校・義務教育学校 8 年生 15 名、長崎へは一般公募の青少年 6 名を派遣いたしました。平和を願う呼びかけに、区民の方などからたくさんの千羽鶴が寄せられました。平和使節派遣生はそれぞれの鶴にこめられた「平和」への願いを胸に、区民の代表として広島・長崎へ献架いたしました。

特に広島の派遣生はそれぞれの学校の文化祭や学習発表会において、派遣生一人ひとりが知恵を振り絞り、友達や地域の方々に一生懸命平和への想いを伝えました。

この「派遣レポート」には、平和式典への参加、資料館の見学、被爆者講話の聴講、碑めぐりなどを通して、派遣生が感じ、学んだ貴重な経験が報告されています。今回の経験を通して、平和の尊さ、大切さに対する認識を深め、その「想い」が学校や職場、地域社会に広がり、あらためて平和について考えるきっかけになれば幸いです。

末筆ではありますが、本事業の実施にあたりご協力いただきました講師の白石多美子様、半田修三様、広島市、長崎市、公益財団法人長崎平和推進協会、千羽鶴を託していただきました方々ほか、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

品川区

目次

はじめに	1
第1部 中学生広島平和使節派遣	
1. 行動日程表	3
2. 広島での主な活動	5
3. 感想文	8
4. 被爆者講話	21
5. 碑めぐり講話	36
6. 成果報告	38
第2部 青少年長崎平和使節派遣	
1. 行動日程表	47
2. 長崎での主な活動	
（1）青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）	50
（2）被爆建造物等のフィールドワーク	51
（3）平和祈念式典	52
（4）平和学習（意見交換）	53
（5）長崎原爆資料館見学	54
（6）自主研修・市内見学	55
3. 成果報告書	57
4. 派遣をふり返って（感想）	63
第3部 資料編	
1. 広島	
（1）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	65
（2）平和宣言	67
（3）平和への誓い	69
2. 長崎	
（1）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第	70
（2）長崎平和宣言	71
（3）平和への誓い	73

第1部

中学生広島平和使節派遣



●派遣生

【写真下左より】

日野学園 : 青山 快
荏原第一中学校 : 齋藤 穂
鈴ヶ森中学校 : 今井 恵偉人
富士見台中学校 : 文園 貴
戸越台中学校 : 近藤 千秋
品川学園 : 鈴木 琉菜
東海中学校 : 松本 麻那
荏原第五中学校 : 寺谷 ディヴィン
浜川中学校 : 飯村 更紗

【後列左より】

荏原第六中学校 : 長谷川 瑞歩
荏原平塚学園 : 西 星美
伊藤学園 : 酒井 やえ
豊葉の杜学園 : 清田 李桃音
大崎中学校 : 久松 希
八潮学園 : 古郡 朋菜

●引率者

豊葉の杜学園副校長 : 夏井 真一
荏原第一中学校主任教諭 : 石田 あかね
豊葉の杜学園教諭 : 山本 蓉
総務部総務課 : 高下 聖矢

1. 行動日程表

第17回中学生広島平和使節派遣 令和元年8月5日～7日(2泊3日)

8月5日(月)

時 間	行 動 内 容	場 所
8:30	集合・出発式	JR品川駅新幹線北口
9:17	品川駅発(新幹線)・昼食	
13:08	広島駅着	
14:00～15:00	被爆体験者講話	広島YMCA国際文化センター
16:00～18:00	原爆ドーム・平和記念公園 見学等	平和記念公園
18:30～19:30	夕食・打ち合わせ	レストラン「リバーズガーデン」
20:00	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22:00	就寝	

8月6日(火)

時 間	行 動 内 容	場 所
6:30	集合・朝食	広島ワシントンホテル
8:00～9:00	平和記念式典参列	平和記念公園
9:30～12:00	意見交換会	広島YMCA国際文化センター
12:15～13:10	昼食	「お好み村」
13:20～13:50	袋町小学校平和資料館見学	袋町小学校
14:00～15:30	広島平和記念資料館見学	平和記念公園内
15:40～16:10	原爆死没者追悼平和祈念館見学	平和記念公園内
17:00	灯ろう流し	元安川
18:00～19:15	夕食	レストラン「リバーズガーデン」
19:30～19:45	灯ろう流し 見学	元安川
20:00	ホテル着・一日のまとめ	広島ワシントンホテル
22:00	就寝	

8月7日(水)

時 間	行 動 内 容	場 所
7:00	集合・朝食	広島ワシントンホテル
8:30	ホテルチェックアウト	
9:00～10:40	碑めぐり講話	平和記念公園
12:00	広島駅到着	
13:17	広島駅発(新幹線)・昼食	
17:06	品川駅着・解散式	
17:25	解散	JR品川駅新幹線北口

◎事前学習会・事後報告会について

第1回事前学習会 6月26日(水)

派遣生が派遣の目的を理解し、より高い意識を持って、派遣に臨めるよう事前学習会を開催しました。

- (1) 派遣生自己紹介
- (2) 非核平和都市品川宣言事業について
- (3) 広島平和使節派遣事業について
- (4) 広島・原爆について学習
- (5) 事前学習課題について
- (6) 派遣日程や生活面・健康管理について



第2回事前学習会 7月17日(水)

各グループが第1回目の事前学習会で決めたテーマ「核に対する人々の意識の移り変わり」「被爆者の方から平和への思い、感じることを聞き自分たちが「平和」に向けてできることを考える」「原爆をうけてからの人々の生活の変化」の内容をグループ内で発表、意見交換を行いました。その内容を各グループでまとめ、全体へ発表しました。最後にスケジュールと注意事項を確認しました。

- (1) グループ学習
- (2) 「派遣のしおり」内容確認
- (3) 派遣の諸注意事項について



事後報告会 8月19日(月)

一人一人が広島で学んだこと、感じたことなど感想を発表しました。その後、今回の経験を同年代に伝えていくため、各学校における派遣成果発表について確認しました。

- (1) 派遣の感想発表
- (2) 広島派遣の写真配布
- (3) 各学校における成果発表について



2. 広島での主な活動

1日目 (8月5日)

- ・品川駅で出発式
- ・被爆者講話
- ・平和記念公園見学
- ・千羽鶴の献鶴





2日目 (8月6日)

- ・平和記念式典参列
- ・意見交換等（被爆者講話や式典を通じて感じたことをまとめる）
- ・灯ろう作り
- ・広島名物お好み焼きの昼食（お好み村）
- ・各種資料館見学
- ・灯ろう流し





3日目 (8月7日)

- ・ 碑めぐり講話
- ・ 解散式



3. 感想文

「今、この瞬間を大切に」

東海中学校 松本 麻那

バスから降りる、手に取った本を開く、毎日何気なく過ごすその瞬間に、それが一瞬で全て壊れてしまうかもしれない。

1分1秒を、大切に大事に生きなければいけない。

3日間の広島平和使節派遣に参加して、これを強く思うようになりました。

今から74年前、昭和20年の8月6日。1発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生を変えました。瓦が沸騰して泡立つほどの3000度を超える熱線、鉄骨を曲げてしまうほどのすさまじい爆風が広島を襲ったのです。さらには、強い放射能を帯びた「黒い雨」が降りそそぎ、放射線による被害はその後長く人々を苦しめました。

そんな当時の広島を、まさに「生き地獄」と表現することもあったそうですが、私が現在の広島の町を目にしたとき、そんな悲劇があったとは到底思えないほど栄えた美しい風景が広がっていました。

広島派遣1日目では、被爆者の白石多美子さんに講話をしていただきました。痛ましく、本当は今も思い出したくもないという74年前のことを丁寧に、分かりやすく語っていただきました。白石さんのお話の中で強く印象に残ったことがあります。それは、「学生生活を楽しんでください」という言葉です。被爆したことで周りの人から酷い扱いを受け、小学校3年生の時には放射線被爆による病を患い、長い闘病生活を続けた白石さんだからこそ願うことなのだと思います。

今、私は毎日3食ご飯を食べ、学校に行き、家族や友だちと会うことができます。それは今の日

本では当たり前のように思えることかもしれませんが、当時は当たり前でなかったことを改めて感じることが出来ました。

2日目には、平和記念式典に参列しました。

「平和記念公園の下、またその隣を流れる川の中には、無念の魂が埋まっている」

式典での、広島県知事のあいさつの中の一文です。実際、平和記念公園は原爆により焼けた土の上にさらに土を盛り、埋め立てて作られました。そんな場所にまさに自分が存在し、友人たちと共に黙祷を捧げる。たくさんの思いが込み上げてきて、とても短く感じた1分間でした。これからの広島が、日本がもう二度と戦争を起こすことなく、平和で安心して日々を過ごしていけるようにと祈るばかりでした。

今現在、被爆者の平均年齢は82歳を超えており、戦争を経験した世代の人々は徐々に減りつつあるのが現状です。近い将来、日本は戦争を知らない人々の集団となるでしょう。だからこそ、被爆体験を聞いた私たちの世代が語り部となり、それを未来へ伝えていくことが重要になると思います。

「悲惨な過去」を「悲愴な過去」で終わらせないために、二度と過ちをおかさないために、今回の派遣で学んだことを周りの人たちに知ってもらい、次の世代に継承し、さらにその次の世代にも受け継いでもらいたいと思います。

広島平和使節派遣に参加して

大崎中学校 久松 希

昭和20年8月6日、午前8時15分、広島に青白い光が襲いかかりました。原子爆弾が投下されたのです。広島では約14万人の人々が亡くなり、多くの方に後遺症が残りました。原爆は人々の命だけでなく、その後の幸せや未来を奪い取っていったのです。

悲惨な過去から74年が経ち、私は平和使節派遣生として広島市を訪れました。するとそこには、原爆の面影がないほど復興した広島街が広がっていました。この光景に私は、被爆者の方々が復興に力を注いできたことが分かりました。

私が広島平和使節派遣に参加して特に心に残ったことは2つあります。

1つ目は、被爆者講話で白石多美子さんから受け取った言葉です。それは、「学生時代を楽しんでください。」という言葉です。原爆が投下され、何百人、何千人、何万人と無差別に人が殺されました。中には、私たちのようなこれからの未来を背負っていく、若い世代の方もたくさんいます。普段当たり前前に生活していることも当時からすれば当たり前ではなかったこと、何気なく過ぎていった今日も被爆者からすれば生きたかった今日、というように考えるとその人たちの分まで生きようと思うようになりました。

2つ目は、平和記念式典への参列です。アメリカ合衆国、ロシア連邦をはじめとする約90カ国が参列しており、たくさんの外国人がいました。その光景に私は、平和への意識が日本だけでなく、国境を越えて高いと感じ嬉しくなりました。また、広島市立の小学生がお話した平和への誓いで「悲惨な過去を悲惨な過去のまみにしない」ということがとても重要だと思います。なぜなら、過去ばかり見ていると何も進まないからです。未来を幸せにするには、私たちが行動しなければなりません。今の私たちのような若い世代は、「原爆」や「平和」についての想いや考えが薄いと思います。しかし、このとても辛い出来事を私たちは決して忘れてはいけません。そのために、被爆者の方や遺族の方の想いを受け継ぎ、同世代の方にもさらに知ってほしいです。それだけではありません。周りの人や後世にもどんどん伝えていき、世界中の人が「平和」について理解を深められる社

会にしたいです。

平和とは、「自分たちで作り上げていくもの」ということをこの広島での貴重な体験や学習を通して学びました。だから、自分にできることを探し、1つでも多く平和に貢献していきたいと思います。

平和のバトンをつなぐために

浜川中学校 飯村 更紗

平和とは何か。私は平和使節派遣として広島を訪れるまで、平和とは「当たり前前の生活が過ぎること」だと思っていました。しかし、被爆者講話をしてくださった白石さんの話を聞き、私は「当たり前前の生活」を送るためには、そもそも「争いがないこと」が大切だと学びました。白石さんは悲しい表情を浮かべながら原爆が投下された当時のことをゆっくりと話してくださいました。白石さんは「いつものように読書を始めようと本を開いた瞬間、すべての窓ガラスが割れ、窓の外を眺めると壊滅した街が広がっていた」と語りました。私は悲劇という言葉で簡単に片付けてはならない事実があったことを知りました。争いがなければ誰も嫌な気持ちにならない。争いがなければ誰も傷つかない。白石さんの「争いがないことが平和」という言葉を重く受け止めなければいけないと私は思いました。

では、平和は誰が築くのか。私はこの地球上にいるすべての人だと思います。広島平和都市記念碑には「安らかに眠ってください。過ちは繰り返させぬから」と刻まれています。私は「過ち」とは「争いを起こしたこと」であり、「繰り返さない」という誓いは、世界中の人々が果たすべきだと考えています。原爆を投下したアメリカあるいは戦争を起こしてしまった日本だけが「過ち」の責任を負うことは間違いであり、1つの国だけが責任を取るべき問題ではないと思います。「過ち」

は国境を越えて世界全体が協力して「繰り返さない」ようにしなければいけません。広島平和記念公園の原爆の子の像には、日本、アジア、ヨーロッパなど本当に多くの国から折り鶴が届いています。私はこの像を見て、これこそが地域や国を越えて平和を目指して行動している証であり、世界中の人々が手を取り合って平和へと歩みを進めることは決して難しいことではないと感じました。地球上にいるすべての人々が行動を起こすことによって平和は実現されるのだと私は思いました。

記念式典の帰り道の元安橋では、募金や署名を呼び掛けている団体がたくさんいました。

また、昔の広島を写した白黒の写真をカラーにしてよみがえらせ、当時の生活の様子を知ってもらうプロジェクトを始めた高校生もいます。世界中のみんなが平和について考え、自分のできることをやっていく。74年前の8月6日。原爆が投下されたあの日から始まった平和への歩み。これまで多くの人がつないできた平和のバトンを受け取るのは私たちであり、そのバトンを未来へとつなぐ役割を果たすのも私たちです。私は広島平和使節を経験する中で学んだことや考えたことをみんなに伝えるとともに、平和のために貢献できることを探し、積極的に動いていきたいです。

8月6日

鈴ヶ森中学校 今井 恵偉人

皆さん、8月6日は何の日か知っていますか？

そうです。8月6日は広島に原爆が落とされた日です。広島と長崎は全世界唯一原子爆弾が落とされた場所です。

この夏僕は派遣生として広島に行きました。広島で白石さんという被爆者の方の話を聞きました。白石さんは当時小学1年生でした、8月6日8時15分、白石さんはいつも通り教室で本を読んで

いました。その時教室が青白い光に包まれました、この光こそが原爆の光です。白石さんは何だろうと窓の方を見ました、その瞬間、爆音とともに窓ガラスが割れたそうです。白石さんとクラスのみんなは慌てて家に帰ろうとしましたが爆風でゲタも飛ばされていたのではだして家に帰ったそうです。白石さんが町を歩くとたくさんの死体が転がっていました。放射能の熱線をあびて死んでしまった人でした。一瞬のうちに何万人もの人が死んでしまうなんて皆さん想像できますか？僕はできません。想像するだけでゾットする話で驚きました。道の途中にはたくさんの死体のせいで、死体の上を歩かなければいけない道もありました、白石さんは死体の上を歩いたことが今でもトラウマになっているそうです。映画でしか見ないような、今の日本ではありえない話を僕は被爆者の方から聞きました、きっと一生忘れないと思います。

2日目、平和資料館へ行きました。平和資料館にはたくさんの人の遺品やその時の様子がわかる写真など、原爆に関する展示物がたくさんありました。その中でも僕の心に残ったのは、原爆で亡くなった小さな男の子のズボンが展示してあり、そのお母さんの言葉です、その言葉は（山ちゃん、どうしてお母さんより先に死んだの）です。ぼくはこれを見てつらくなりました。僕よりも小さい子供が母親より先に死んでしまうことを考えたからです。他にもたくさんの遺品や説明が書かれていて、その一つ一つが失われた尊い命だと思うと、原爆の恐ろしさを感じました。その日の夜の灯篭流しでは心から世界が平和になることを祈りました。

僕はハワイのパールハーバーにあるアリゾナ記念館に行ったことがあります、そこでもたくさんの戦争の様子を知ることが出来ました。僕が思ったのは、どの国で戦争がおこったとしてもたくさんの尊い命が失われるということです。特に原爆は一瞬にしてたくさんの命を奪う恐ろしい兵器で

す。二度と使ってはいけない兵器だと強く思いました。8月6日を僕は一生忘れません。

「二度と戦争を起こしてはいけない」

富士見台中学校 文園 貴

私は、夏休みに広島平和使節派遣に参加して「広島で起こったことを絶対に日本は忘れてはいけない・繰り返してはいけない」と思いました。

このように考えた理由は、次の3つの広島での体験によるものです。

1つ目は、被爆者の白石多美子さんの話です。被爆者の方の話の中で一番驚いたのは、「原爆が落ちたときの恐怖で足にガラスが刺さっていたのに家に帰るまで気がつかなかった。」という話でした。私は今まで恐怖で痛みが消えることなどなかったため原爆が落ちたときの恐怖は、今の人には絶対にわからないものだと思います、そのような体験はしたくないと思いました。

2つ目は、広島平和式典で語られた「平和宣言」。当時自らも大けがを負いながらも目にした惨状をつづったこの詩に加えて「絶対にこのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい」と話されていました。これから大人になり私たちが国を背負っていかなくてはなりません。平和の文化を育てるために私たちにできることを一人ひとりが考えていかなくてはならないと思いました。

3つ目は、広島平和資料館です。この広島平和資料館は、今回の広島平和使節派遣の中で一番驚いたところでした。ここでは被爆者の遺品や被爆者の方が書いた原爆投下直後の様子の絵などが展示されていました。とても今では考えられない衝撃的な絵や写真に、出入りの際のみんなの顔が暗かったのを覚えています。中でも、核兵器一つによって人生が台なしになってしまった人の手紙を読んで心が苦しくな

りました。また、核兵器の衝撃波で骨すら残らなかった人もいたことを知りました。

私は被爆者の方や広島平和式典での「言葉」を通じて原爆の恐ろしさを理解していたつもりでしたが、広島平和資料館で実際のものを見て、改めて核兵器の恐ろしさを感じました。

私自身、この広島平和使節派遣で、原爆の恐ろしさを知り、多くの亡くなった人たちの無念な気持ちを想像し、被爆者講話をされている方々の後世に語り継ごうという気持ちに触れ、今の自分について・生活について考える機会となりました。決して、原爆被害をこれから体験する人がいてはならないのです。原爆を落としてしまうと落とされた人の生活は、二度と戻ることはないのです。生き残った人は苦痛を耐えなければならなくなります。戦争はけんかと同じです。自分だけでなく、周りを巻き込んでしまいます。しかし、お互いがお互いのことを考えることができれば、けんかも戦争も起こることがありません。自分がこれをしたら相手がどうなるかを考えて行動すればいいのです。大量の犠牲者を生む戦争はやってはいけない、一人ひとりがそう思えば世界は少しずつ変わっていくと思います。変わっていかなくてはならないと思います。

世界中で100%に

荏原第一中学校 齋藤 穂

「29.5%、25.6%」この数字は、日本全国を対象にした、広島、長崎に原爆が落とされた日を知っているか？という質問の正答率です。この数値は決して高いものではありません。また、被爆者の平均年齢も82歳を超え、私たちは戦争や原子爆弾を直接経験した方々から話を聞くことができる、最後の世代と言われています。だからこそ、私たちが戦争の無い世界の大切さを後生へと伝え

続ける義務があると思います。

私は今回広島を訪れて、戦争が残したものは、後悔と罪悪感、そして憎しみだけであると感じました。

1日目は白石多美子さんによる被爆者講話がありました。白石さんは学校で本を読む直前に被爆したそうです。「体中にガラスが刺さりながらも必死で家に帰った。恐怖とパニックで痛みを感じなかった。」と言っていました。私は痛みを感じないほどの恐怖とパニックとはどんなものなのか、そう考えるだけで恐ろしくなりました。その後も病院で相手にしてもらえなかった時の事や、学校で周りの人から近寄るな、と言われいじめられた事など聞くだけで苦しくなるような話を一つ一つ話してくださいました。

2日目には広島平和式典に参列しました。私は、その中で子ども代表が言ったある言葉がずっと頭に残りました。それは、「悲惨な過去を悲惨な過去のままで終わらせない」という言葉です。この言葉を聞く前の自分は、広島にこんな過去があったと調べて、ただ学んでいるだけでしたが、それでは意味がありません。過去は変える事ができないからです。しかし、過去に対する向き合い方を変え、それを自分の物として未来に生かす事は、私たち中学生にもできる事です。

3日目には、被爆者二世の半田修三さんによる碑めぐり講話がありました。その中で半田さんが「原爆を受けたのは兵士ではなく、広島で普通の生活を送っていた女性や子ども達だ」という事を教えてくれました。その事を知った時、軍や戦争に賛同した人たちにより戦争が始まり、結果的に何の罪もない沢山の人々が人生を楽しむことなく亡くなってしまった。そして生き残った人の中には、何年も何十年も、さらには子どもや孫にまで放射能の被害に苦しむ事になるという事に胸が痛み、怒りが沸き起こりました。

「人間が想像できる事は、人間が必ず実現でき

る。」この言葉はジュール・ヴェルヌの言葉です。この言葉のように、私たち一人一人が核や戦争を無くす事を望み、伝え、全世界に広げることができれば、核や戦争を無くす事さえも不可能ではありません。

一人一人が強く平和を望むために、一人でも多くの人に広島や長崎の真実を知ってもらう必要があります。「29.5%、25.6%」この数字が日本だけでなく、世界中で100%に近づけるように、私たちは戦争を体験された方々の、正確な情報を伝え続けていかないといけないと思いました。

平和な未来を創るために

荏原第五中学校 寺谷 ディヴィン

私が広島平和派遣に応募した理由は、未来の日本を担う私達は戦争を過去に起きた一つの出来事として知っておく必要があると思ったからです。未来について考えるには、まず過去を知るべきだと思います。広島に行って感じたことは大きく分けて3つあります。

1つ目は、「私達があたりまえにできていることが、当時は何一つあたりまえではなかった」ということです。これは、被爆者講話を聞いてほとんどの派遣生も感じたことでした。戦時中は栄養のある食べ物がなく、住む家もないという状況で、みんな必死に生きようとしていました。また、被爆者講話をしてくださった方は、「学生時代に辛い入院生活を送った上に、その後も差別を受けてしまいました。だから、あなた達には学生時代を楽しんでほしい。」というメッセージを伝えてくださいました。

2つ目は、平和記念資料館で見た歴史の悲惨さです。私は実際に戦争を体験した訳ではないのに、とても恐ろしく感じました。資料を見ただけでも思っていたくなく思ってしまうのに、実際に戦争を経験

してしまった方達の心の傷は計り知れないです。

3つ目は、戦争を二度と繰り返したくはないという思いの強さです。戦争で負った心の傷が未だ癒えていない人は大勢います。大切なものが守られる世界をたくさんの人が願っているはずです。私達は消えていった多くの命のために、これから生まれ、そして生きていく命のために、1日でも早く平和な世界を実現させなければいけないと思います。

私が広島で学んで思ったことは『私達はただ歴史を学ぶだけではなく、自分が何をしたら平和な世界を創ることができるのかを考えるべきだ』ということです。戦争が起きていないことだけが平和ではないです。自分がただ生活できて幸せならばそれで良いのではなく、相手の気持ちを考えてみたり、家族や友達を大切にすることが平和に繋がると思います。また、身の回りにはさまざまなことで苦しんで泣いている人がいるということを知ってほしいです。人の「不幸」というものは、決して分りやすいものではありません。だから、他人と比べたり、軽く扱ったりするのではなく、耳を傾けたり、できる限り寄り添ってほしいです。

平和な世界は誰か一人が願ってできるものではなくて、みんなが願わないと実現しません。難しいことをしようとしなくても、『一人でも多くの人が平和について考え、そして強く願うこと』だけでも何かが変わるのではないかと私は思います。

私たちができること

荏原第六中学校 長谷川 瑞歩

1945年8月6日8時15分。広島に住む14万人もの罪なき命、そして人々の当たり前の毎日が一瞬で失われました。

私たちが、「平和のためにできること」。広島派遣に行く前の私は、なかなか思いつかず、私達に

できることなど果たしてあるのだろうか、というのが正直な気持ちでした。しかし、実際に広島派遣に行き、私達ができること、これからすべきことが、明確になりました。

被爆者講話では、白石多美子さんから話を伺いました。当時6歳だった白石さんはいつも通り学校へ行き、そこで本を読もうとした瞬間、窓に青白い光が見え、物凄い轟音がしたそうです。急いで学校から家に帰り、母と会ったときに初めて頭や足などに多くのガラスが刺さっていることに気が付いたほど、必死だったと言います。74年も前の出来事で、まだ6歳という幼い頃の話ですが、まるでつい最近の出来事のようにはっきりと、時々声を詰まらせながら私達にお話ししてくださる白石さんを見て、これは本当に恐ろしい出来事だったのだと実感しました。白石さんがお話ししてくださった中で、私たちに伝えてくれたことが3つあります。「学生時代を楽しむ」こと、「両親に感謝する」こと、「言葉は大事」ということです。今の時代、私たちがこれらのことを意識して生活することは少ないと思います。しかし、私は原爆が投下された当時の話を実際に聞き、今の生活が当たり前ではないのだと知り、この3つの言葉の重さ、大切さに気づきました。そこから、私がすべきことは被爆された方から聞いた原爆の恐ろしさ、そして今の生活が当たり前ではないということ伝えていくということだと思います。74年経ち、被爆者の方は年々減っていて、被爆者の方からお話を聞く機会がない人の方が日本の中には多いかと思っています。だから、被爆者の方々からお話を聞いた私たちが、聞いた話を広めていくべきだと思いました。

8月6日に私たちは平和記念式典に参列しました。そして8時15分、黙祷を捧げました。74年前、私たちが黙祷をしている静かなその時間に、その瞬間に、約14万人もの人々が亡くなり、当時の

人々はどのようなことを思っていたのか。白石さんから聞いたお話を思い出しながら、黙祷後、そんなことを考えていました。『原爆ドーム』を初めて自分の目で見た時の衝撃は忘れられません。テレビで見た時の数倍迫力があり、その無残な姿と周りの綺麗な街並みとの対比が原爆の恐ろしさを物語っていました。原爆ドームは市民の意志により、反対の意見もあった中、残すことになったそうです。そうして辛い過去を形に残してくれている。だから、私たちはそんな過去に正面から向き合っていくべきです。

『原爆投下』。この言葉を聞いて思うことは人それぞれでしょう。怖い、恐ろしい…しかし、そんなことを思って辛い過去から目をそらしてはいけないと思います。10年、20年後には被爆者はかなり少なくなります。今、目をそらしたら増々原爆の恐ろしさを知らない人々が増え、同じ過ちを繰り返しかねません。だから、今の私たちがすべきことは原爆が投下されたという暗い過去と向き合い、一人一人が原爆について知ろうとすること、そうすれば少しでも平和に近づくとと思います。

広島で学んだこと

戸越台中学校 近藤 千秋

私は、広島に行ってたくさんの事を学びました。まず広島に行く前と後の平和に対する気持ちが大きく変わりました。派遣前は平和とは戦争がなくなり、人々が明るく楽しんで生活することだと考えていました。しかし、派遣後は、ただ単に戦争がなくなればいいという考えではなく、核という恐ろしいものがなくなり、もう二度とあのような恐ろしい出来事があってはいけないと平和に対する考えが深まりました。

1日目、広島に到着し、被爆者講話を聴きました。最初被爆者の方がお越しになられた時、私は

正直なところ、本当に被爆したのかなと疑問でした。私は想像の中で、ケロイドなど傷がひどいのだろうと思っていたのですが、見たかぎり、傷も何もなかったので少し驚きました。お話が始まる前、被爆者の方（白石さん）は、少し話すことをためらっている様子でした。その様子を見て、私には理解しきれない苦勞をしたのだなと思いました。白石さんのお話を実際に聴いていると冷静に聴いてられないようなことばかりありました。例えば、頭にたくさんガラスの破片がささった話や死体をまたいで歩いた話など今では考えられないことばかりでした。他にも血をダラダラと流した人の話など驚く出来事ばかりでした。小学生の時にも被爆者の方のお話を聴く機会がありましたが、初めて聴いた時はまだ幼かったせいか、話を聴いても心に響きませんでした。しかし、今回の被爆者講話は、事前に原爆について調べたり、世界の戦争や内戦などに関心を持ったことにより、話の一つ一つがとても心に残りました。私は、実際に戦争を体験したことはありませんが、白石さんの講話を聴いたことにより、戦争の恐ろしさを改めて実感することができました。

そして、私が広島に行って一番印象深かった場所は原爆ドームです。原爆ドームは、広島に派遣される前からずっと気になっていました。なぜなら、原爆ドームは負の世界遺産に登録されており、とても興味深かったからです。そして、実際に原爆ドームを見ました。写真では何回も見ているのですが、実際に見ると、とても迫力があり、偉大さが伝わってきて、これは実際に見た者にしか感じるこのできない感情だと思いました。また、私は今まで、原爆ドームに限らず、写真で見られるものは写真で見ればもう十分だと思っていました。しかし、今回広島に行ったことにより、写真だけではわからないことがたくさんあるということを知りました。

最後に、今回広島に派遣されて、私が一番伝えたいことは、日本が今いかに平和であるかということです。まだまだ世界には戦争によって苦しんでいる人々がいます。私は将来困っている人々を助けたいと考えています。そのためにも、これからもっと視野を広げ、戦争を中心に学習を深めたいと思います。

平和への思い

日野学園 青山 快

今から74年前の8月6日、広島に世界で初めて原爆が投下されました。

原爆投下から74年目の今年、僕は広島使節派遣団として広島を訪ねました。現在の広島を目にして、僕は東京と同じような大都市であることに驚きました。本当に原爆が投下されたのだろうかと思えるほどでした。そんな広島に原爆の面影を残していたのは、「原爆ドーム」でした。そばに立つと、原爆が投下されたという真実を語りかけているように感じました。

僕はこの3日間を過ごして、強く心に残ったことが3つあります。1つ目は広島に原爆が投下されたという悲惨な事実があるにも関わらず、74年という月日が経っても未だに核を製造する国があり、国際問題となっているということです。2日目に僕は広島平和式典に参列しました。その時に頂いたパンフレットを見て95カ国の人々が参列していることを知って目を見張るほど驚きました。日本であればテレビで視聴することができるのにも関わらず、様々な地域から多くの人々が式典に参列するために来ていました。参列者全員が、平和を願っているのだと式典の様子から強く感じました。

2つ目は、核が投下されたことによる悲惨な現実を忘れてはいけないということです。2日目の平和記念式典に参列した後に広島平和記念資料館を

見学しました。そこには、被爆者が描いた当時の状態の絵や原爆投下直後の壊滅した広島にある市街地の模型、被爆死した動員学徒たちの遺品などがありました。それらを見ていて目を背けたくなるものもありました。資料館から次の場所へ移動をしている際も、光景が浮かぶほどでした。展示してあったものが心から離れませんでした。この悲しい事実を決して忘れてはいけないと思いました。

3つ目は原爆の恐ろしさを被爆者が中心となって、被爆体験を継承するための活動がずっと行われているということです。1日目の被爆者講話や3日目の碑めぐり講話では広島に原爆が投下された時の様子だけでなく、道には死体がたくさん転がっていたこと、被爆者だからという理由で結婚をしたり、仕事をしたりすることが自由にできなかったことなどといった、とても悲しくて話にくいことを僕たちのために話してくださりました。辛く悲しいことであっても、後世に被爆体験を伝えてくださっているのだと分かりました。

この広島派遣を通して核がある限り平和は訪れないということが分かりました。決してあってはならないのですが、僕達も核によって今の幸せな生活や楽しい時間がなくなってしまうかもしれないのです。核は絶対に廃絶すべきです。

今後は、被爆者講話でお話して下さった白石さんがおっしゃっていた通り、悲惨な戦争を経て、今の平和があることを忘れないように学校生活を楽しまたいです。また、僕の通っている学校のたくさんの人に今回の派遣を通して感じたこと分かったことを自分なりにまとめて伝えて、平和の大切さを訴えていきたいです。

平和のために

伊藤学園 酒井 やえ

「ヒロシマ・ナガサキ」そう聞いて、原子爆弾

を思い浮かべる。しかし、この事実を知っている人は多くとも、実際にあの日・あの場所がどれほどの地獄絵図であったのか、私も含め、世界の人々は驚くほど知らない。生きたくても生きられなかった人々、74年たった今もなお、苦しみ続けている人々がいることを知らない。

「核兵器が必要だ」そう言っている人には、まず、広島・長崎へ行ってもらいたい。被爆した方々の前でも「核が平和を守る」と言えるのだろうか。

私は、今回の派遣で平和について考えた。平和とは何か、どうしたら平和な世の中になるのか。

まず、平和とは。私は、「一人一人が輝いている」「人権が大切にされている」社会のことだと思う。白石さんの被爆体験のお話や資料館、半田さんの碑めぐり講話などを聞いても分かるように、74年前の日本は平和だったとは言えない。今の日本はどうだろう。争いという観点から見たら、戦争も紛争もない日本は、平和に思えるかもしれない。だが、今の日本では本当に一人一人の生命・人権が大切にされているのだろうか。

次に、平和な世の中にするためにはどうすれば良いのか。

1つ目は、過去の戦争について「知ること」だ。私は、今回の派遣で戦争の悲惨さ、残酷さを知ることができた。戦争の時代に生きていない私たちにとって、全てを知るのは難しい。だからこそ、少しでも戦争について知るための努力をし、同じ過ちを繰り返さないために、何を反省すべきかを考えなければならない。一番怖いのは、無関心だ。私たち自身のことなのに無関心では、誤った方向へ向かってしまったときに、止められなくなってしまうからだ。

今の日本は、平和への関心が必ずしも高いとは言えない。日本でも、あまり原爆への関心がない人もいる。むしろ、外国の方々の方が詳しいことさえある。実際に、8月6日の平和記念式典では

外国の方々が多く見受けられた。一人でも多くの人が原爆について知り、平和について考えてほしい。

2つ目は、「平和の心」を育むことだ。争いには、複数の国家間での大きな争いから、いじめのような身近なものに至るまで様々な形がある。つまり、いじめを無くそうと努力することは、もうすでに平和への第一歩を踏み出しているのと同じことだ。白石さんも、半田さんも、もう二度と同じような思いはしてほしくないという「平和の心」から、戦争について語ってくださっている。資料館の被爆者の方々の遺品からも、平和を願う声が聞こえてきた。家庭や学校などで日頃から、平和について考えることも大切だと思う。

私は、今回の派遣で戦争の残酷さ、悲惨さについて知り、平和についてより一層思いを深めることができた。平和と聞くと難しそうなイメージをもちがちだが、私にもできることはあるはずだ。広島での体験を生かして、平和を実現させていきたい。この世の中を動かしているのは、私たち。平和をつくるのも、私たちだ。

『当たり前とは何か』

八潮学園 古郡 朋菜

— 1945年8月6日 午前8時15分 —

広島街は一瞬にして地獄となりました。

皆さんは『平和』とはどんなものだと思いますか。私は派遣される前は平和とは戦争がなく、お互いを思いやって過ごす事だと思っていました。しかし今回の派遣を終えて、『平和』には色々な種類があるのだと分かりました。

私が広島街を見た時の第一印象は、『綺麗』『栄えている』でした。街全体が明るい雰囲気での場所に原爆が落ちたとは到底思えませんでした。

派遣1日目は被爆された白石多美子さんの講話

を聞きました。私は講話を聞いた時衝撃を受けました。なぜなら、自分が想像していたよりも原爆直後の広島は悲惨な状況だったからです。見た目では男女の区別ができないほど皮膚が焼けて垂れ下がった人などが水を求めて歩き回っていたそうです。白石さんは私たちに『学生を楽しめ』という言葉くれました。その言葉を聞いた時、私は今生活しているのを当たり前のことのように思っているけれど、それは決して当たり前ではないことなのだと思いきました。

派遣2日目は平和記念式典に参列し、その後袋町小学校平和資料館、平和記念資料館に行きました。平和記念式典に参列して胸に残ったのはこども代表の『平和への誓い』の『悲惨な過去を悲惨な過去のままで終わらせないために』という言葉です。『悲惨な過去を悲惨な過去のままだにしないため』に自分は何ができるのだろうかと思えてきました。

平和記念資料館では被爆投下直後の広島の状況や原爆症について知ることができました。特に心に残ったのは、被爆者の遺品です。焼け焦げた弁当箱、ぼろぼろになった洋服などは原爆がどれほど恐ろしいものかを物語っていました。平和記念資料館の見学後、私はなぜ普通に生活していた人がこんな目に合わなければいけなかったのかと強く思いました。それと同時に幸せな日常はあっという間に終わってしまうのだなと思いました。

派遣3日目は半田修三さんの碑めぐり講話を聞きました。中でも印象的だった場所は『被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）』です。この場所は爆心地から約200mだったのにも関わらず被爆当時の地面が74年経った今でも残っています。私は地面が残っていたことも凄いなと思ったのですが、それ以上に平和を願って地面を残そうと努力した人々が凄いなと思いました。

原爆は人の幸せを一瞬で奪うものだと思います。

日本が過去に起こしてしまった過ちを取り消すことは出来ません。ですがその過ちを2度と起こさないように努力することは出来ます。平和が続くために私達が出来る事。それは原爆について知り、周りの人に伝えることだということを今回の広島平和使節派遣で学ぶことができました。



「広島平和使節派遣に参加して」

荏原平塚学園 西 星美

今回、私は中学生広島平和使節派遣に参加できて本当に良かったと思っています。この三日間は私にとって、とても充実した三日間となりました。

まず、広島に着いて一番初めのスケジュールが「被爆者講話」でした。しかし、あまりにもその話は、悲惨で深く心に突き刺さってきました。広島に着いたときは、広島の街があまりにも普通に栄えていて、本当に原爆が落ちたのかが分からなかったのですが、被爆者の方の話を聞き、悲惨さを実感することができました。血だらけになっているのに気が付かなかったこと、痛みすら忘れていたこと、水をあげたら人が死んでしまったこと。すごく心に残っています。それに、こうやって原爆について話すのも辛かったというのも印象深かったです。今まで、そのようなことを考えたことがなかったので、被爆者の方にも本当に感謝しなければならぬなと思いました。

次に、平和記念資料館が印象に残っています。この資料館は、今まで行ったことのある資料館とは比べものにならないくらい印象に残りました。被爆した方々の服や絵、持ち物、病気のことなどたくさん展示してありました。一つ一つがあまりにリアルで約70年前の広島にいるような気分になってきました。怖くなって、明るいエリアに行く気持ち、ホッとしました。資料館の被爆した方々の遺品が展示してあるエリアは、誰一人と

して口を開かず、静まりかえっていました。私は、事前に色々と原爆について調べていったのですが、まだまだ学習が足りなかったです。また、訪れたいと思いました。

夏休みが終わり、学校生活が始まって思ったことがあります。広島から帰ってきたときに、私が思っていた「平和」を実現させるのは、なかなか難しいです。日常を辺り前だと思わずに、毎日感謝して生きる。毎日を大切に楽しむ。私一人ができたとしても、クラス全員がこれを意識できるのは難しいです。

でも、少しでも一人一人の手助けになるように、私は発表を頑張ります。聞いている人に思いが届くように、心に残るように一生懸命練習します。あと、「平和」についてのみんなの意見も聞いてみたいです。そして、一人一人に何ができるのかも考えてもらいたいです。

まずは、戦争や原爆についてよく知ってもらいたいです。私も、もっとこれらのことを調べて広めたいです。今は、「どうして原爆が落とされたのか、落とされる前に何があったのか」ということを調べています。いろいろと考えが変わったり、初めて知ることがたくさんあったりして、とても興味深いです。

今回、広島に行け原爆について知るきっかけにもなってよかったです。今、自分が生きているのは本当に幸せで、だからこそこの出来事を忘れないう、伝えていけるように、これからも生きていきたい。



「伝えること」

品川学園 鈴木 琉菜

8月5日から7日までの3日間、私は広島派遣に行って来ました。

1日目は被爆者の白石多美子さんのお話、そし

て平和記念公園に折り鶴を捧げました。2日目は平和記念式典への参加、資料館の見学、灯籠流し。3日目は、碑巡り講話を聞きました。今回は1日目の白石多美子さんのお話、2日目の記念式典の2つを中心にお話したいと思います。

私たちは広島に着いてすぐに、被爆者である白石多美子さんの被爆体験について聞きました。白石さんは、今でもあの日のことは、痛ましく、思い出したくないと伝えてくれました。話そうと決意するまで約30年かかったその傷が、埋まることはありません。しかし、原爆のことは、後世に伝えなければならないと2013年からボランティアとして活動しています。1945年8月6日午前8時15分。当時6歳の小学1年生だった白石さんは毎日のように登校しました。

教室の席に座ったとき青い光が見え、轟音が響きわたりました。たった一瞬で窓ガラスが粉々に割れ、みんな廊下で泣いていたそうです。下駄は飛ばされ足の裏が痛いという感覚も忘れるくらいお母さんに会いたくて夢中で家まで帰りました。そして、無数に転がっている死体。

74年前、今の私たちには想像も出来ない光景がそこには、広がっていました。人間も動物も焼き尽くされ、広島県全体が焼き尽くされた臭いは、今の私たちには感じることも出来ません。

私たちには、友達も家族も先生方も、支えてくれている人が大勢います。昔とは違うからこそ当たり前の生活に感謝していこうと思います。

2日目は平和記念式典に参加しました。式典では、日本の安倍総理大臣をはじめ、93か国から代表者が式典に参加していました。一般の人も多く来ており、国際問題にまで発展している核保有。現在、核保有は、新たな側面をみせはじめています。このような状況下に置かれている私たちは、当事者一人ひとりとして深く考えていかなければなりません。そして、私たちには何ができるかを考

える一つの機会になっているのではないのでしょうか。これこそが平和記念式典を行う本当の意味なのかも知れません。

人間の力で作り出した核兵器は作ってはいけなかった凶器です。そして、その凄まじい力に耐えられる生命を人間は持っている。人を傷つけるためではなく人を助けるために用いるべきではないでしょうか。

私は今回、広島に行くことができ、平和というものは過去に戦争で苦しい思いをした人からの贈り物なのではないかなと思いました。今では、会えなくてもスマートフォンなどの携帯でいつでも会話をすることができます。そして会ったら言葉を交わすことができます。このような毎日は、何気ない毎日の幸せなのです。そして、幸せは言葉の積み重ねなのです。私は、戦争のない今だからこそ一人でも多くの人に原爆、戦争の恐ろしさ、何気ない幸せをかみしめて生きてほしいと思います。

最後に白石多美子さんが私たちに伝えてくれた言葉を皆さんにも伝えたいです。

「平和を体と心で感じ、感謝を忘れないこと、私たちの分まで学生生活を楽しんでください」と。

伝え続ける

豊葉の杜学園 清田 李桃音

焼けただれた皮膚、抜け落ちた髪。沢山の遺体が浮かぶ川。

昭和20年8月6日8時15分。その日、広島に落とされたたった一つの原子爆弾は約20万人以上もの未来を奪った。その悲惨な街の様子を言葉では聞いていた。本でも読んだ。しかし、広島に行き、広島平和記念資料館で私の目に飛び込んできた写真などの資料や遺品は、私の想像をはるかに超えるものであった。

現地で幼くして被爆された白石さんのお話を

伺った。白石さんは「当時の事を話せるようになるまでに、とても時間がかかった。」とおっしゃっていた。この言葉から、白石さんの心の傷の深さが伝わってきた。ご自身のけがに加え、転がった遺体、血まみれの人、ただれた皮膚で水を求める人など、思い出したくないほど悲惨な光景を見たのだそう。目の前にいくつも遺体が転がる壮絶な光景が広がっている。考えただけでも目をそらしたくなるような恐ろしいことが、74年前の広島で起こったのだ。初めて実際に被爆者の方の体験談を伺い、被爆者の方の思いをたくさんの人に伝えたいと思った。

広島平和記念資料館で見た痛ましい写真や絵、亡くなった広島の人々の遺品は、今でも私の脳裏に焼き付いている。「痛い」「苦しい」「もうやめて」という写真に映る人たちの心の声が聞こえてきた。原爆ドームを間近で見た。色々なところが歪んでいた、穴が開いていたりして、原爆の恐ろしさを物語っていた。ここにある写真や建物を見ても核兵器を使えるだろうか、戦争を行えるだろうか。私もここへ来て本当の意味で原爆の恐ろしさを、人間の犯した過ちを痛感した。だからこそ、伝えたい。被爆者の方々の「平和」への思いを。罪もなく被害を被り、亡くなられた方々の魂の叫びを。

「私たちは何を伝えるべきなのか。」この3日間、それを探していた。その中で私はこの派遣を「原爆」という面で見えていなく、「戦争」という過ちを見ていなかったことに気づいた。そして、私は「原爆や核の恐ろしさ」だけでなく、「争いのない世界にする」と伝えることが一番大切であると感じた。「人と人が争い、結局どちらかが傷つく。そんな世界はもうやめにしたい。」という私の思いを、誰か一人でもいいから届ける。それが私の使命なのだ。過ちという言葉は、過去の「過」という字を含む。犯してしまった人々の過ちをも

う二度と犯さない為に過去がある。だから、過ちという言葉には過去の「過」が入っているのではないかと私は思った。

広島に行き、「争いがいいこと」、それがやはり「平和」の象徴なのではないかと感じた。語り部の方が少なくなってきた今、私たちの世代で語り継いでいくことが必要だ。争いをなくす為に「平和な社会」を実現する為に、私たちは伝えることを止めてはいけない。だから私は伝え続ける。私ひとりでは無力かも知れない。しかし、一人一人が、人間が犯した大きな過ちを悔やみ、反省すれば、平和への道を切り開くことができると思う。世界の人々が手を取り会える日を目指して。

《派遣生の感想》（一部抜粋）

- Q. 広島に行く前と後で、平和に対して自分の中で変わったこと（もしくは、平和について改めて感じたこと・考えたこと）
- ・平和への思いはよりいっそう強くなった。
 - ・命に対しての考え方、まわりの人と出会ったことに対する感謝。
 - ・「原爆」という面では、この派遣を見ていなかったが、私たちが最も伝えるべきことは「戦争」を起こしてはならないという意識が変わった。
 - ・平和は、世界各国のトップが仲良くして初めて訪れるものだと感じた。
 - ・平和というのは一人一人が毎日楽しく過ごし、命や身の回りのことに感謝しながら生きること。
 - ・平和記念資料館などを見て、広島にいたたくさんの方々の「生活」も「命」もその後の「人生」も壊されたということがわかった。
 - ・平和はとても幸せであることを改めて実感した。
 - ・戦争を経験していない私たちは特にじっく

り平和を考えることがあまりないけど、今も心の傷が癒えていない人たちもいるから、平和を守りたいと一人一人が思うことが大切だと思った。

Q. 同級生または後輩へ平和について一番伝えたいメッセージは。

- ・平和は当たり前じゃなくて、人生の先輩がくれた贈り物。
- ・語り部の方が少なくなってきた今、伝えられるのは私たち若い世代です。私の話を聞いた人がまた違う人に伝える「バトンをつなげること」それがまず1番大切です。少しずつでもいいから「伝え続ける」「過去に学び、未来に生かす」という事の大切さを1人でもいいから心に届けたいと思った。
- ・是非広島に行って、資料館を見たり、町をよくみてほしい。そこから、今がとても平和だということを知って、今後の生活を過ごしてほしい。
- ・今の暮らしがずっと続くか分からないし、いつかいきなりくずれてしまうことがあるかもしれない。だから、1日1日を楽しみ、様々なことに感謝していくべき。
- ・一生に一度は広島か長崎に行き、平和のありがたさを感じてほしい。
- ・今は、日本では戦争が起きていないけど、海外では子どもが戦争に出ている国もあって、平和といえる状態ではないので、改めて平和とは何か考えて、平和な世界にするために自分にはなにができるかを考えてほしい。

4. 被爆者講話



被爆者講話

白石 多美子 氏

皆さん、こんにちは。今、紹介していただきました白石多美子といいます。現在ね、80歳になったんですよ。だんだんに声が出なくなるというか、気管が細くなるんでしょう。聞こえにくかったら、また言ってくださいね。ちょっと聞こえませよって言ってください。なるべくちゃんとお話しできるようにしようと思っています。

私は、1939年、昭和14年広島に生まれました。そして、現在、先ほどお話ししたように80歳になりました。60歳までは一生懸命お仕事しました。2000年から平和記念資料館のピースボランティアという、平和のボランティアをやりませんかというのがあるって、定年退職と同時にやってたんです。今もまだやっているんですが、もうやり始めてから20年になります。

2000年から、そういうピースボランティアをし始めたんですが、こういうふうに皆さんにお話しするようになったのは、もう随分後からです。なかなかお話しできませんでした。それはあまりにもあの痛ましいことにたくさん遭いました。苦しくて苦しくて思い出

したくないことがたくさんあったんです。ですから、お話しできなかった。でも、何とか、2013年からやっとお話をしないといけないんじゃないかなというふうに思えるようになりました。皆さん、聞こえてますか。大丈夫ですか。そしてね、やっと、スタートしたばかりでまだ間がないんですが、でも、一生懸命お話しして、わかりやすくちゃんとお話ししようと思っています。

私の住んでいたまちのことをちょっとだけお話ししたいと思います。宇品というところなんです、広島ですね。南のほうの海の瀬戸内海側です。そこに私は生まれ育ちました。そこで父と母と私の3人家族で住んでいたんです。私は一人っ子でしたので、当時は、一人っ子というのはすごく何か珍しいというか、非国民のように思われていて、そして、産めよ、増やせよっていうふうな時代でした。でも、うちはやっと私が生まれたというようなことで、一人っ子で随分と苦しい思いもしました。

宇品というところは兵隊さんがたくさん集まるところで、何って言ったらいいですかね。お父さんと家族がね、別れるまちでもあったんです。お母さんとほとんどの兵隊さんは来ていましたが、その兵隊さんも船に乗って戦争に行ってしまう。そういった港もありました。宇品には2つ桟橋があってね、1つは、軍の専用の桟橋がありました。もう一つは、市民が乗ったり降りたり、瀬戸内海ですから、島がたくさんあってね、そこから、今日はちょっと体調が悪い。だから、広島に行っておよと思う、広島病院へ、行っておよと思うのよということで、出かけてくる、島

のほうから出かけてきたり、そして、こっちに来たら、また、宇品のほうから島へ帰っていく、そのようなことがあったんですが、でも、それは市民の市営棧橋というのがあってね、市民だけが使う棧橋があって、2つに分かれていた、軍とね。そういうふうなまちでもありました。

兵隊さんがいろんなところね、遠くから来られるんですが、お母さんとほとんどの方がね、来られたり、ひとりで来られたりする人もありましたが、その兵隊さんたちは、今日船が出ると、1日から3日間ぐらいは出ません。その間を泊まるんですけども、旅館が10軒ぐらいありましたが、いろんなことでたくさんの方が来るときがあって、そして、その兵隊さんたちは泊まれない。お母さんたちも泊まれないっていうふうなこともたびたびありました。そういったときには、隣組というのがあって、今の町内会のようなものですが、その隣組からの組長さんからね、私は白石ですから、白石さん、お宅に今日は何人、明日は何人ぐらいっていうふうな、その日によって人数は変わりますが、兵隊さんを泊めてあげてくれませんかというふうなこともありました。

うちの母は、もう3人きりで寂しい家庭でしたので、いいですよ、どうぞ泊まってください。当時は食べるもの、ほんとうにありませんでしたから、ですから、いいですよ。食べるものは十分なことはできませんが、お風呂はゆっくり入って、そして、あかを落として、そして、出かけてくださいね。日本のことをお願いしますっていうふうなことを母はよく言っていました。その民家に兵隊さんが泊まることを兵隊宿と言っていました。そういうね、私は家庭で育ってきました。

そして、うちの父は陸軍運輸部船舶、船のほうへ、乗っていたんですね。船の機関長だったんですが、めったに帰って来ることがない、お家にね、帰ってこれないんですよ。船ですつと泊まるんです、船の中でね。だから、いつもお母さんと二人きりでね、今日もお父さん帰ってこないから寂しいねと言いながら過ごしたものです。そして、そういったことがあって、おばあちゃん、私の母のお母さんなんですが、そのおばあちゃんが1週間に一度ぐらいうちの家にね、来てくれていました。お父さん、また帰ってこれんのじゃねって言いながら、来てくれてね、そのときには、当時のおかずになるようなもの、というのは、サツマイモの葉っぱの茎とかね、それから、あとはカボチャの葉っぱのやっぱり茎、そういったものをね、持ってきてくれていたんですね、お芋を持ってきてくれたりね。また、お芋、当時はちっちゃかったですけどもね。でも、大きくなるのはすごく大きくなるんですが、時期がね、まだ、いつもいつもそんなに大きくなるわけではないので、時期的にちっちゃいときもありました。

そういうおばあちゃんが来てくれて、そして、兵隊さんをね、送りに行くときには、これぐらいのね、日の丸の旗を紙でつくるんです、障子紙のようなんでね。で、ここにね、木で、木といっても、箸のようなものですが、そういったもので竹とかね、そういうふうなものをここに付けて、そして、それを持って、兵隊さんをおばあちゃんと一緒に送りに行くんです。そしたら、そのときに帰りにね、海を見ていたら、おばあちゃんが、来てごらん、タコがカニ追いかけてるよっていうね、そういうふうなこともありました。うわーすごいねって見てたら、そのうちにタコは墨を吐い

てカニを捕まえて、そして、すーっと逃げていくっていうふうな感じでね、そういうふうなものも見たり、楽しいこともあったんです。とてもね、穏やかなまちでもありました。



そういったところでぼつぼつ私の被爆体験のお話をしようと思います。

皆さん、よく知っているように、1945年8月6日のことです。明日はね、74年目になります。そのときにね、私は小学校の1年生、6歳でした。そのお話をするときについて、ほんとうにね、今日のように、今日よりもっと暑かったかもしれないと思うくらい暑い日でした、8月6日は。お天気でね、すっごくね、青い空がいっぱい見えて、そして、暑いなーって思いながら学校に行きました。1年生と2年生だけです。教室の中はね、3年生以上はみんな集団疎開で、お金を出して行くんですよ、もちろん。だけど、行けない人もいますよね。そういう人が一人か二人ぐらいまざっていたのでしょうか。でも、ほとんどが1年生と2年生、1年生、2年生はちっちゃいからね、置いといてあげようよ、お母さんのへりにね、いさしてあげようよっていうふうな思いやりもあったと思います。それはね、やはりちっちゃい子は泣いたりします、よくね。だから、そういうふうな思いやりもあったんじゃないかと思っております。

その日はね、とっても暑い日だったので、

たまらないなって言うような天気だったんです。今日のようなお天気だと思ってください。そしてね、学校に行って、そして、かばんはまだ教室に入らないで、そのあたりにぼーんと投げといてね、で、私は走ることが好きだったので、運動場をね、半周、1周走るとものすごくおなかがすくんです。十分なものを食べてないんでね。だから、おなかがすくので、半周走りました。よーし、これで今日も頑張れるぞと思って教室に入りました。

教室でね、入ってすることといたら、まず、一番最初に、ここに防空頭巾をつけていました。ですから、その防空頭巾を取って、そして、ここの机の横にね、当時はね、五寸くぎって言っていたんですけど、こんな大きなくぎ、それがここの横に打ちつけてありました。そこにかけてました。でね、ここにね、かばんをかけていたの。かばんは、今のようにお金を持って行って、これをくださいって気に入ったものを買うんではなくって、お母さんが、着物の帯を皆さん、見たことありますか。その帯をほどいてね、そして、中に、帯はね、きちんところう、ぴちんところうならんといけないので、ここに芯が入っているんですよ、中に。白いきれの固いものが入っているんです。それをね、全部ほどいて取って、それを一針一針お母さんが縫ってくれたかばんです。ですから、私にとってはとても大事な大事なかばんでした。

そのかばんをね、ここに掛けていたんだけど、かばんをここに置いて、かばんから本を出して、また、ここにかばんはかけました。必ずね、ここにかけるということをそのあたりに置いていたりしてはいけないうふうな先生から習っていたので、ここにかけました。そして、本を読もうと思ってね、本を

こうして出したんですね。読もうと思って視線を本に向けたときに、右側の天窓、青白い光が見えました。そうですね。写真なんかで昔はフラッシュをたくとこう青白いような、白いような光がぱっと出る、そういうふうな光でした。何の光だろうと思って、見たと同時にものすごい轟音が響きました。そして、教室の中は10人ぐらいいたんですが、大騒ぎになりました。そして、その窓ガラスが全部壊れて、そして、雨のように飛んできたんですね。それがあつという間の出来事だったので、この机の下にも何かあつたときには、爆弾が近くに落ちたりしたときには、潜ってちゃんと自分の身を守るんですよってということも先生から聞いていたんです。だけど、何一つすることはできませんでした。机の下に潜ることすらできなかつた。みんなね、泣きながら大騒ぎになって、泣きながら、もう帰ろうと、家に帰ろうと思うこと一心だったんですね。

だから、急いで廊下に出ました。廊下に出たら、廊下にはげた箱があつて、そして、そのげた箱には名前がちゃんと書いてくださっていました、先生がね。あなたたちも1年生のときに先生がげた箱に名前を書いてくれてなかつたですかね。そういったね、ことがあつて、そして、げたも、靴ではありません。シューズはありませんでしたからね、げたです、みんな。げたも、右と左をそろえて、そして、きちんとこの爪先が奥に入るように、いくようにげた箱に自分の名前が書いてあるところに入れるんですよって、そういうことまできちんと先生から習っていたんです。そのげたを履いて家に帰らなきゃ、大変なことが起きたらと思って、げたを履きに廊下に出たんですね。そしたら、げた箱には一足もげたがあり

ませんでした。多分あの爆風でね、近回りではあつたと思いますが、飛ばされていたんじゃないかなと思います。そして、みんな、はだしで、10人ぐらいいたんだけど、はだしでみんな各自帰ったんです。ばらばらになつてみんな帰ったんです。

私の家は、学校から300メートルぐらい離れていたところにありました。そこまで走って帰るんですが、今のような道の、きれいな舗装してあるような道ではありません。土の道です、全て。だから、そこをね、走って帰るんですが、民家からもたくさんガラスが壊れて、そこの道に落ちていた。きらきらと光っていたんですが、それも、もうその上をみんなはだしで帰ったっていうんですね。で、私自身もはだしで帰って、そして、帰ってお母さんの顔を見るまで足の裏が痛いということも気がつきませんでした。それくらい大変なことだったんですね。

家の少し手前の角のところ、お母さんが行ったりきたりして待っていてくれたんで、お母さーんって言いながら走っていきました。そして、お母さんも走ってきてくれました。お母さんが一番最初に言ったこと、「まあ、あんたの顔はどうしたんね。血まみれじゃないの」って言ったんです。それで、自分ではわかりませんでした、軽傷ではあつたんですが、このあたりにね、2カ所ガラスが飛んできたのが、3センチぐらいのね、ここに刺さっていた、2カ所。そして、手はこのあたりと、やはりこうしていたから、右側から爆風とか、ガラスが飛んできたんで、この内側のほうに2カ所、手のほうもガラスが刺さっていたんですね。そういうけがをしていることすら、わからないぐらいの怖さでした。お母さんが「とにかく家の中に入りなさい。あ

んたの顔はどうしたんね。血まみれじゃないの」って言われたんです。もちろん頭から、ガラスが頭に刺さっていたんで、頭から血が出ていたので、顔に血がこぼれていたんだと思うんです。そういうふうに母が言ったんだと思います。

そして、待ってなさいね、ちょっとね、薬箱を持って来るから。昔はね、これくらいの木の箱で薬箱があったんです。それにいろんな消毒液とか、それから、包帯とか、ガーゼとかというふうなものがね、ちゃんと入れてあったんですね。それを一個持ってきたら全部間に合うっていうふうなことだと思ってください。その箱を持って来るから、待ってなさいよって。持ってきて、お母さんがまず一番最初に、頭から血が流れていたんで、三角巾は皆さんわかりますよね。三角巾でこうね、縛ってくれました。手もね、縛ってくれたんですよ。そしてね、それが済んだら、お母さん、私は、頭も痛いし、手も痛いけど、足の裏も痛いんだけどねって言ったんですね。お母さんの顔を見たからほっとしたんだらうと思うんです。痛いところがいっぱい出てきたんですね。お母さんが、じゃあ、見てあげようって言って見てもらって、ガラスが足にいっぱい、はだしで走って帰ったんで、いっぱい刺さっていたんです。そのガラスをね、足の裏からピンセットで取ってくれました。少し歩けるようになって、ピンセットでね、お母さんが取ってくれたら、こうしてやったら、皆さん、ここにちょっとくぼみができますね、真ん中に。ここをね、小山ができるくらいね、足の裏にガラスが立っていたんです。それをね、取ってくれて、少し歩けるようになったので、3軒隣に外科病院があったんです。だから、そこに母は私を連れていき

ました。そして、院長先生、娘が学校でこんなけがをして帰ったんです。診てやってくださいってお願いしました。院長先生は、白衣を着ながら出てこられたんですね。ちょっとだけ診てね、ああ、お母さん、こんな傷は傷のうちに入らんけ、家、連れて帰ってから赤チンでもつけときんさいって言っちゃったんですよ。

その赤チンというのは、当時の液体の消毒液です。こけてすりむいたりね、膝っ小僧をすりむいたり、このあたりでもすりむいたりしたら、その液体の赤チンというのをつけますね。そしたら、人間には体温がありますから乾くんですね、液体でも。乾いたら、へりからこうね、横のほうから見たら、きらっと光るんです。赤黒くね、光るような、何か変なほんとうに、今でいうね、インチキの薬ではないのかなっていうふうな感じ、そういうふうな薬でした。でも、その薬も、もうね、随分前につくってはいけない。水銀が入っているからつくってはいけないということで、日本ではつくらないようになったということを知っています。

その薬をね、平気でつけたら、治るって言われたりして、つけてもらうようにみんなね、していたんですが、私は、家に帰って、そういうふうにすれば治るって言われて、でも、先生、こういうふうな大きなガラスが頭に立っるとるんだから、診てやってください、何とかありませんかって、母がね、食い下がったんですね、院長先生に。そしたら、院長先生は、ガラスは中に入らないって言われたんですね。体の中に回らないから、大丈夫だから。だけど、針は違うぞと。針は、血管のほうへね、折れた針が、針の先が折れて血管のほうでも入ったら、血が体に回るから、だか

ら、そのときには一緒に針も回るかもしれない。だけど、ガラスはもう刺さったら、そこにずうっとね、刺さったままだから、だから、心配せんでもええ。きずが癒えたらって言われたんですが、癒えたらというのは治ったということ、治ってきたらということですよ。そのきずが癒えたらね、どうもせんでも、ガラスがここ、頭へ立っとなっても、ぼろっと落ちるけ、大丈夫じゃけ、連れて帰れ、はよ、連れて帰れって言ってんですよ。うちの母はものすごくね、食い下がったんですよ。何で先生、診てもらえないんですか。けがをしているんですよって言ったんです。だけど、ほんとうにそれは診てもらえませんでした。



そのときに、後からね、母と考えて言ったことなんです、後からトラックがね、来たんですよ、軍のトラック。それにはたくさんのひどいけがをした人、やけどをした人が積まれていました。積んでいたんですよ。救護所といっても、救護所ももういっぱい。だから、4キロも離れた、爆心地から、私が学校で被爆したところまでは4キロですがね。でも、4キロよりも、だから、4.3キロぐらいありますよね、家まで。その家から病院まで行って、そして、診てもらおう。その間が、うーん、そうですね。その間にたくさんの人をトラックが運んできたんだと思うんですよ。そのトラックからおろされた人、その人はやけどをしたり、たくさんのけがをしたりする人

が乗せられていたんですが、とにかくもう早く帰りなさいって言われて、追い返されるようにもう帰ろうとして、玄関を出ようとしたところで、軍のトラックと鉢合わせをしました。

そこで、いろんなね、たくさんの方がトラックに積まれていたんですが、一番最初におろされた人、担架でおろされたんですが、その人はここからね、このあたりからね、ずうっと切れているんですね。何かやっぱりガラスかなんかが飛んできて、こう切れたんだと思うんです。それをね、自分の着ていた上着か、タオルか、人様からもらったものかわかりませんが、それでこうして押さえていたね、こういうふうにして。もうこの先の肘のところからは手を伝わってたらたらたら血がこぼれていました。それを見てね、怖くて、お母さん、もうはよ帰ろう、家に帰ろうって言って、母の手をほんとうにひどいこと、あんたはひどいこと、あれしてからいうて、母が言ったんですがね、青あざになるぐらいつかまえて、お母さんと一緒に家に帰りました。

その日は、もう8月6日の日はどこにももう私は出ませんでした。で、少しね、8月6日の夕方ごろね、少しあたりがちょっと静かになって、暗くなりかけたときに、家の前の道からザラザラザラザラというね、音が聞こえてきました。何の音なんだろうな、あの音は。何か怖いことがあるんじゃないかなっていうふうな気持ちで、私は耳をそばだてていました。だけど、外に出て、気にはなったんですよ。何の音かなって思って気にはなったんですが、外に出て何の音だったっていうのを見るね、元気も勇気も、もう残っていませんでした。ですから、そのままお母さんが寝られんのじゃね、本読んであげようかねって

言って、本を読んでくれて、そのままもう表までね、出て、外まで出て、そのザラザラの音を確かめることはできなくて、そのまま眠ってしまいました。



7日の朝と8日の朝と9日の朝、その3日間をちょっとお話ししようと思います。

7日の朝ね、起きなさいよ。はよー、起きんさいって起こされたんですね、お母さんに。眠いから、まだしっかり目があいてなくて、お母さん、もっと寝たらいいのんねって言ったんですね。そしたら、いや、もうすぐね、行かんといけんのんよって。どうしたんねって言ったら、おばあちゃんがね、きのう来ることになっていた。うちに来ることになっていたのに来てないから、探しに行かんといけんでしょ。だから、早く起きなさい、支度をしなさいっていうことだったんですね。おばあちゃん、どうしたんかねって言ったら、きのうって言いましたから、8月の6日のことだと思います。

そのときに、じゃあ、私、支度してきますって言って、支度をしに行って、私の部屋が一番道に沿ったところに部屋があったんですね。そこからね、少しだけね、カーテンをこうあけて見たんです。当時はね、真っ黒ですよ、カーテン。真っ黒のね、ピアノカバーが黒いのがかけてありますね、ああいうふうなカーテンです。でね、そのカーテンのところを少しだけこうしてあけてみました。そし

たら、そこに見えたのは、髪がね、頭の髪がちりちりに舞い上がって、焼けてですよ、焼けてちりちりになって、そして、この一番上の皮膚、この正面、正面からその人は熱線を浴びたんだろうと思います。

でね、その皮膚が全部ぼろぼろになって、ぼろ雑巾ってよく言いますよね。雑巾がぼろぼろになってね、垂れ下がったようにね、皮膚が全部垂れ下がっているんです。それを土の道に引きずりながら避難する人の姿だったんですね。それを見て、私は震え上がってしまって、お母さんのところへ走って行きました。お母さん、私は、今日はお母さんと一緒に行くことはできません。一緒には行きませんって言ったんですね、それを見て、怖くて。でね、手をね、なぜかこういうふうにして、みんな、避難する、逃げてくる人はみんな、こんなに、けがをした人はこんなにしましたね。そして、やけどをして、とにかく全部たらたらに、全部がぼろぼろに下がっている、皮膚が。着たものも、もちろんもうほとんどはだか、焼けてしまってね。そういうふうな人が南のほうへ、南のほうへと避難してきたんです。南のほうにうちの家はありましたからね、宇品というところは南です。広島市の南側です。ですから、そっちのほうに避難してきたんだろうと思います。

そのときに見て怖くて、お母さん、行きません、私はって言ったら、もう7日の日、だから、原爆が投下され一晩だけ眠って明くる日ですよ、7日の日。その日はね、うーん、そうですね。どう言ったらいいかな。えーっとね、7日の日ね、とにかくね、そのこう、ちょっとねえ、言いにくい、言いにくいんですけどね、気持ち悪がらないでくださいね、皆さんね。垂れ下がった人、そういったのを

見ているもんだから、とにかくおばあちゃんを探しに行くということに自分から行こうというふうな、おばあちゃんに来ることになっていたのに、来てないから行ってあげないといけないというのはわかるんですよ、自分で。だけど、どうしても行く気になれなかったんですね、そのときに。行きませんって言ったら、お母さんにものすごく大きな声で叱られました。

それは7日の日にもう母は新型爆弾が広島に落とされたということを知っていました。多分ね、軍のほうからの何かがあったんだろうと思います。新型爆弾が広島に落とされたと言っているのに、あなた、ひとりをここの家に置いていく、お母さんはおばあちゃんを探しに行くわけにいかないでしょう。だから、あなたは一緒に行くんですよって言われて、仕方なく、私は、じゃあ、行きますって言って、歩くんですよ。とにかく何も走ってないんだから、自転車に2回ぐらい会ったでしょうか。4キロも5キロもね、歩いておばあちゃんを探しに行きました。でも、7日の日はまだ残り火というか、火がね、燃えていました。火事のように燃えるのではなくてね、ちっちゃな火がたくさんあっちもこっちもね、通れないように燃えていました。

そこをね、通っていくのに、たくさんの死体が転がっていました。その死体をね、またいで通らないと通れないところもあったんです。だから、母がちょっとこっちへ来なさいって言って呼んで、私が母のところに行ったら、ここを母は通ろうと思うんですね、この道を。だけど、ここには死体が転がっています。焼け焦げた死体が転がっていた。だから、その死体をまたがないと、あっちもこっちもいっぱいまだ火がね、ちいちゃな火にしても、家

が燃えたりしていたんで、だから、危ないから、そこをどうしても通ろうと思ったんですね。そして、手を合わせなさいって言って、母と二人で手を合わせて、ごめんなさい。通してください、前に行きたいんですって言ってね、母が通してくださいって、手を合わせて言って、そして、二人でまたぎました。死体をまたいんですよ。ねえ、だけど、それは戦争だったからです。今ね、そんなことをしなさいって言って、できることではありませんよ。だけど、戦争でどうしてもそういうふうにしないとイケなかった。だから、そういうふうにもしたんだと思います。7日の日はずっと探したんですが、見つかりませんでした。死体をね、死んだ人を、真っ黒こげになったような死んだ人をまたいだことがすごく私にはトラウマになったんですね。お母さん、私、頭が痛いとか、足が痛いとか言って、そして、結局7日の日は探すことがあまりできませんでした。で、帰ってしまったんですね。

8日の日は、朝起きて、今日は救護所だけを回るから、だから、一緒に行こうね、お母さんって言われたんですね。救護所だから怖くはないよって言われたんですが、今、考えてみたら、救護所のほうが怖いような気がします。救護所は、ひどいけがをした人がいっぱい運び込まれていたところですよ。ですから、怖くないからねって言われたから、それにつられて、じゃあ、行きますって言って、一緒に行きました。

救護所へね、着いて中に入ったら、表現のできない、嫌なおいがありました。何のにおいですかって、よく言われます。でも、皆さん、後から質問されると、時間があるかどうかかわからないので、先に言いますが、何のに

おいて、聞くんですよ、単刀直入に。でね、それを私はね、どう言ったらいいかなと思ったんです。でも、結局家もね、それから、人間も、動物も、人間もですが、人間が飼っている猫とか、犬とか、鶏とか、ねえ、そういったような飼っている、当時に飼っていた動物、そういったものも焼き殺されているんですよ、みんな。だから、人間ももちろん焼き殺されたけども、でも、動物、人間も動物も全部一緒です。一緒に焼き殺されてしまったんですよ。だから、人間も、それから、おうちのね、樹木がお庭にちょっと大きな木が植えてあったりしますよね。そういった樹木、そのようなものとか、それから、あとはね、家とか、それから、いろんなね、広島の全てが焼き尽くされたにおいだよっていうふうに、私は、小学生さんが質問したときには言います。そのにおいがどんなにおいで言われても、私にしかわからないにおいですけども、でも、そのように言ったほうが、そうよね、わからないよねっていうんではいけないのではないかなと思うから、そういうふうには私は今、言っております。

そして、救護所へ入ってね、お母さんはどんどんどんどん自分の母親を探すために前に行くんですよ。私は、後ろからとことこついていっていたんですが、その後から行っていたときに、何か足にさわったような気がしました。あ、何だろうと思って、下を見たら、男の人か女の人かわかりませんが、真っ黒にやけどしているような人でしたが、「お水をください」って言ったんです。ああ、この人はお水が欲しいんじゃない。7歳ですからね、まだいいも悪いもあんまりわからないようなころです。ですから、お水をあげたらいいんとかいうふうなことは思っていないから、

だから、お水が欲しいんだ。じゃあ、取ってきてあげよう、見てあげようと思ったんですよ。入ったところを後に戻って、裏側のほうに回ったところに水道の蛇口が爆風で壊れて、お水があふれ出ていたところがあったんです。それはそこだけではなかったそうです。私はそこだけしか見てないんですが、広島にはたくさん水道の蛇口が壊れて出ていたそうです、お水がね。だから、それで助かった人もいるかもしれないよねっていう話もあります。だけど、それはね、どういうふうな、ほんとうのことかどうかわかりませんがね。で、お水を取ってきてあげようと思って出たら、裏へ回ったら、お水が出ていました。それをね、今だったら、湯飲みとか、お茶碗とか、あのようなものが壊れたものがね、焼けてこげていたりとかしても、そういったものがあつたら、それに受けて持って行ってあげたら、もっとお水をあげられたと思うんです。だけど、お水を手で受けてしまったんです、私は。お水をね、その人のところまで行ったときには、もう歩いていくから、お水がこぼれてしまって、この中に手についた水滴のようなものしか残ってなかったんです。でも、仕方なくね、その人の唇の近くに持って行って、2回振りました、手を。そしたら、ぽとぽとここに落ちたんです、2滴。でね、その人は「ありがとう」って言ったんです。それがね、私はね、すごくうれしくて、ああ、よかった、ありがとうって言っちゃった、この人はと思ったんです。

そのときに救護所の中のお世話をしている人が二人いました。どんな人か、私は覚えておりません。あえてその人の顔を忘れるようにしたんだと思います。二人いた中の一人がね、その人にお水あげたらいいんって走って

こられた。皆さんね、言葉というのはね、すごく大事です。だから、ほんとうに言葉は大事に使わないといけないなと思うんですね。人が傷ついたり、喜んだり、いろんなことができる言葉です。その言葉がね、私に言ったことがね、その人がこの人にお水あげたらいけんって言われて、走ってこられて、その人は決して悪気があったわけではないでしょうが、このあたりをぼんと突かれました。ひっくり返って尻餅をついて泣き出してしまいました。そのときにね、まだその人は言ったんですよ。「あなたは、この人にお水をあげたから、この人が動かんようになったでしょ。死んでしもうたでしょ」って言ったんですよ。それがまたトラウマになりました。とてもね、苦しい言葉でした、それはね。忘れることができないんですね。で、何かね、大きな声でね、今でも、大きな声で話をするのではなくって、向こうのほうの人を呼ぼうと思って、とめようと思って叫んだりするような人がいます、時々ね。そう言ったのはね、ここにすぐが一とくるんですよ、耳のところにね、その声がある。あのときの声によく似てると思ったりすることがあります。ですから、それがやっぱりトラウマっていうふうになるんだろうと思います。

そして、8日の日はそう言われて、もう泣き出してしまっ、母もどうしようもないので、一応ね、くるっと回って、似たような人をおばあちゃんはフジって名前でしたから、聞いて、フジじゃありませんか、違いますかって言いながら、一応ね、その救護所を聞いて歩いたんですが、おばあちゃんはいませんでした。で、結局、8日の日も何もおばあちゃんを探すことができなくて、帰りました。



9日の日、牛田のほう、北のほうですけどね、広島市の。北のほうに牛田というところがあるんですが、水源地があって、そこに、そのあたりにたくさんあそこにも救護所ができていて、たくさんそこへ連れて行かれていってという話を近所の人に聞いて、で、おばあちゃんを、あそこへ、今日はね、あそこへ行こうねって言って、もう7歳でもね、やせて細かったので、ちいちゃくて、だから、母がよくね、足が痛いと言ったら、おぶってくれたりして、何とか二人で探して歩きました。やっとおばあちゃんをね、牛田で見つけることができました。でも、おばあちゃんはね、背中からあの熱線を浴びて、背中一面真っ黒にやけどしてしていました。そのときに寝られない、上に向けて寝ることができないので、おばあちゃん、こうして伏さって寝ていたんですね、寝かされていました。で、見つけて、母が、まず、「お母さーん」って走って行ったんです。そしたら、私も後から走っていこうとしたら、二、三歩歩いたところで、おばあちゃんの背中から、真っ黒いハエ、大きなハエがね、ぱーっと飛び立ったんですよ。それを見てね、ほんとうに足がすくんでしまっ、おばあちゃんのところまで行けなかったんですね。でも、当時は、そのときは暁部隊という部隊があって、そして、そのトラックがたくさんの動けなくなったような人をね、連れて帰ったり、救護所に連れてくれたりす

るような、ほんとうに当時はありがたいトラックでしたから、そのトラックにお願いして、そして、おばあちゃんをうちの家の近くの軍の救護所へ入れることができました。

でも、おばあちゃんは3日後には亡くなってしまいました。3日後にね、亡くなる1日前にね、母のことを「しーちゃん」って言うていたんですけど、しーちゃん、あなたのおすしはとってもおいしかった。だから、おすしを食べさせてほしいんだけど、スプーン一杯でいいのよって。だけど、だめかねって言いました。母はね、一生懸命ね、ご近所とか、少し離れたところの知り合いのところへも行きましたが、お砂糖とか、酢とか、そのようなものはぜいたく品ではありませんでした。ですから、食べさせてあげることではできなかったんですね。仕方なく、もうね、仕方がないね、食べさせてあげることができないねって、おばあちゃん、食べさせてあげられない、何も無いのよって言ったんです。だけど、そのときにはもうね、おばあちゃんは亡くなりました。うちはそのおばあちゃんにおすしを食べさせてあげられなかったのよ、いまだにね、もう母は亡くなりましたが、いまだにおすしをね、何かあったときにはおすしをつくって、子どもとか、孫とかに仏様に持って行ってあげてねって、おばあちゃん、食べんさいよってあげてねって言って、持っていくかすようにしています。

そのようなことがあって、私は、中学校もいろんなことがあったんですが、まず、小学校で小学校の3年生のとき、学校に行きますよ。そしたら、調子が、体調が悪くなって、で、下痢が続いたりとか、あとは、高熱が出たりとかいうふうなことがあって、病院に、日赤病院に、当時は日本赤十字病院と言って

いたんですが、今は日赤病院・原爆病院というふうになっていますが、そこへ約1年間入院しました。治療のためです。ちっちゃいほど、放射能というのはよく受け入れられるんだそうですね、体の中に。だから、大変だったんだろうと思うんですが、そういうふうなことで入院したんですが、何とか治療はね、とってもつらい治療でした。でも、絶対に死なないぞ、絶対に助からんといけんと思ったんですね。父も原爆が投下される10日ぐらい前にはもう船が沈んで死んでしまいましたので、ですから、母と二人きりです。ですから、お母さんをね、悲しましちゃういけない。助からんといけん。ちょっとでも、いくら苦しくても頑張らんといけん。しんどい治療でもね、受けて、そして、元気にならんといけんと思いつつながら生活をしました。

そして、退院して、小学校の4年生のときに退院しました。4年生になるときにね、学校に行きました。学校に行ったら、まあ、疎開をしていた子がいるんですね。縁故疎開といってね、お母さんとか、お父さんとか、親戚の家に預けられる、そういう子どもがたくさんいたんですね。でも、その中の3人ぐらいの男の子が、広島弁で言いますが、「こんな原爆に遭うとるんじゃけん。へりにおるなよ、へりに寄ったら原爆の病気がうつるんで」って言ったんです、私に向けてね、みんなの前で、教室の中でね。決して原爆の病気がうつる病気ではありません。人にうつす病気ではありませんが、自分が苦しむだけです。だけど、そういうふうになんて言われて、そして、学校に行けなくなったときがあります。そのときに母は一生懸命ね、働いて、私を育てなさいいけないというのがあったりして、私にずっとついていてるわけにはいかないわけで

す。ですから、日雇い労働者として母も一生懸命働きました。

そのときにね、ついて、あなたと一緒にあってあげたらいいんじゃないけど、家においてあげたらいいじゃないけど、お母さん、仕事があるけん、行かんといけんからねって言って、これをあなたにお願いねって言って、雄鳥が1羽、雌鳥が1羽、ぽんとかう置いてしまったんですね、私に。学校に行けないんだったら、この鶏の世話を全てしなさいって言われて、で、結局は私が鶏小屋の掃除をしたり、いろんなことをしました。やっとね、鶏もなれるというか、きれいになったから、おいで言ったら、言葉がわかるわけではないんでしょうけども、もう、入ったら、小屋の掃除がしてあると思うんでしょうね。帰ってくるんですね、ちょっとしたらね、放していても。そのときに雄鳥がとてもね、ボスのような、悪いんですよ、雌鳥のトサカのほうをちょっとつついたりもするんだけど、でも、私に意外となれてくれて、そして、何となく私は、コウタという名前が当時は好きだったので、コウタ、小屋の掃除ができたし、餌も入れてあげたけん、帰っておいでって言ったら、雌鳥と一緒にコッココッコって帰ってくるんですね。雌鳥はさっともう小屋の中へ入ってしまうんだけど、雄鳥のコウタだけは、ここに来て座ってくれるんです。砂浴びをするように羽根を広げてね、ぐじゅぐじゅ私が話をするんです、コウタに、鶏のコウタにね。今日は学校に行けなかった。でも、明日は頑張ってみるからねって言うと、コッココッコって言いながら、それを聞いて安心したよってというような感じで、小屋の中に入って行く。そういうふうな鶏のコウタに私は心を癒されました。

兄弟がいないのでね、一人っ子だったので

ね、誰にも話をする事ができなかった。うつうつって言われて、学校にも行けなくなったりした。でも、私は、なるべく考えないようにして、そして、自分が思うこということを母に言っていました。中学校は、私立の学校へ行かせてくださいって言いました。でも、私立の学校へ行ったら、月謝が要るんですよ。だから、月謝が要るんだから、お母さん、そんなにお金がないからって、うちはもう貧乏になったからねって、あなたが病気したりしたから、お家もあつたのを売ったし、うちはお金がないのよ。だから、普通に一緒にね、小学校から中学校へ上がってくれるって言ったんだけど、私は、だめ、絶対に嫌だって。それはまた苦しい思いをするのを積み重ねるような気がしていたんですね。中学生になるちょっと前ですからね。で、受験さしてください。お願いします。受験さしてください。お願いしますって、それね。ほんとうにあればっかり言って、一生懸命話をもっていったんですが、母はだめって言っていたんです。

でも、最後になって、じゃあ、受験だけしてみるかねって言ってきて、もし、お母さん、通ったらどうするのって言って、通っても行かしてくれんのでしょって言ったら、そのときのことよ。だから、通ったら通ったときのことよ。ねえ、だから、今からそんなことを考えることない。まだ受験も受けてないのに、試験も受けてないのに、そんなこと考えんでもいいって言われて、そして、まあ、ちょっと日にちがたったんですね。どうしてももう締め切りが来るから、お母さん、だめかねって言ったら、まあ、受験だけしてみなさい。通るか通らんかわからんものだからって言われて、それから、猛勉強したんですね。

受けて、受けるんですが、一番最後に通った
かもしれませんよ。だけど、通ったんです。

さあ、どうしようかということになって、
母が初めて、私に通ったんだったら、お母さん
も一生懸命頑張るから、あなたもお母さん
に協力してねっていうことを言いました。何
の協力かなと私は思いましたが、何でもしよ
うと、そのときには思いました。港に近い、
海に近いところですからね、うちのいたと
ころは。だから、アサリ貝がたくさん掘れると
ころだった。その貝をいっぱいとってきて、
お母さんに、これだけ今日は掘ってきたよっ
て、潮の満ち引きがあるのでね、とれるとき
だけしかとれないんですけど、だけど、アサ
リ貝をとって、持って帰るんですね。母がこ
れを朝、お魚屋さんへ持って行って、そし
て、ちゃんと売ってくるんですね。そしたら、
売ってきたら、このバケツ一杯でも、例えば
ですよ、金額が100円。100円でそのお店
が買ってくれたとしますよ。そしたら、すご
くね、金額が少ないわけですよ。母は考えて、
その貝を全部ちっちゃな小刀でね、ナイフで
ね、こうしてね、あけてあけ身にするんです、
貝を。それを同じほど持っていったら、100
円を買ってくれていたものが300円を買っ
てくれる。だから、そういうふうなことを私
は協力をしたんです。お金を稼ぎに行ったり
とかいうんじゃないかってね、そういう体を動
かして、お母さんに協力するということを一
生懸命頑張ってしまった。

中学へ行ってだんだんと元気になっていっ
て、私がね、中学というのは意外とね、あの
当時はいろんなところから、呉のほうから来
たりとか、岩国のほうから来たりとかね、廿
日市のほうから来たりとかっていう、広島市
の周りのほうからも来るような生徒さんがた

くさんいたので、被爆しているということを知
らない人がいっぱいいる。そういったこと
をね、私は知られないで済んだ。で、日々元
気になっていきました。

21歳で結婚ができました、です。ねえね
え、結婚したんよではありません。被爆者は
結婚できる人が少なかったんですね。男性も
女性も、お嫁さんに来てもらえない、お嫁さ
んに行けないというような人がたくさんいま
した。ですから、そういったこともね、たく
さんあったんだよっていうこともね、覚えて
帰ってほしいなと私は思っています。

私は、子どもが2人いたんですが、主人に
ね、結婚するときに言えなかったんですね、
被爆者でありますっていうことを。で、黙っ
て結婚しました。そのときに少ししてわかっ
てしまって、ああ、もうこれ、離婚かなと思っ
たんですね。そしたら、主人も優しい人だっ
たと思うんですが、広島の人には原爆に遭った
人が多い、男性も女性も大変だっただろうと。
あんたも、もしかしたら、原爆に遭うとんじや
ないかの、思うて、思うのは思うとった。だ
けど、言えんかったんよ、僕も言えんかっ
たんよって、聞かれんかっただって言ったん
ですよ。まあ、ごめんなさいって言うのは言
いましたが、でも、それで、そういつて言っ
てくれたおかげで離婚もしないで、子どもも
2人できて、とってもいい子です。孫もね、
上のお兄ちゃんも子どもはできませんでした、
弱い子でしたから。でも、下のね、娘は子
どもが男の子ばかり3人、双子が1組ね、
いたり、そういうふうなね、とってもね、
いい子ばかり。おばあちゃんがね、言うこと
ですよ、それは。どこのおばあちゃんでも
ね、孫はかわいいから、いい子ですよ、
うちの孫はかわいいですよって言うんです
けど、でも、

私も胸を張ってね、うちの孫はいい子です、優しい子ですって言えるような孫を産んでくれて、娘にも感謝。そして、息子にもね、感謝ですね。子どもがいなくても、やっぱり私たちのことを考えてくれるっていうふうなこと、いろんなことをね、感謝をもってね、一生懸命やってきたんですね。

ですから、皆さんもね、一応お父さん、お母さんには感謝する。ねえ、こういうふうに広島まで来らしていただくっていうこと、とてもね、ありがたいことだと思いますよ。ねえ。ですから、私は、感謝ということが好きで、感謝をしているいろんなことを習っていったり、したり、覚えたりっていうようなことを皆さんにもしてほしいなと思います。

そして、最後になりましたが、私はね、どうしても皆さんにお願いしたいことが最後にあるんです。ちょっと時間がなくて、ごめんなさい。

広島ではね、昭和20年8月6日に大変なことが起きました。原子爆弾が投下されて、同じ年の12月までには14万人プラス・マイナス1万人が亡くなっています。皆さんはね、学生時代を楽しんでください。学生がね、中学生が7,000人ぐらいいたの。ねえ。それが6,300人ぐらい亡くなっています。皆さんと同じような中学生、そういった人もね、夢や希望があったのに、何一つ報われることがなくて亡くなってしまいました。ですから、二度とね、このような悲しいことが起きないように、平和を皆さんに守ってほしいなと思うんです。平和ってわかりますよね、皆さん。争いのないことですよね。それは平和のことは、体と心で平和をね、あー、平和ってこんなもんなんだっていうことをね、知ってほしいな、感じてほしいなと思っています。

いろいろとね、遅くなりました。ごめんなさい。これでね、私の話はね、終わります。ちょっとね、大丈夫ですから、質問を受けましようかね。

【久松】お話の中で、水をあげてはいけないということがあったんですけど、その水をあげたから死んじゃうというのはどういうことですか。

【白石】あのう、重傷患者にはお水を急に与えるとよくないっていうことは後から聞いたんです。でも、私は、そのことを知らなかったのだから、教えてもらってなかったのだから、叱られたんだと思うんですよ。だけど、やっぱりお水を飲んで、しっかり出ていたのを、あふれ出ていたのを飲んだから助かったんだよっていう人もいたんです。だから、どちらとも言えませんよね。うん。いいですか。

【清田】すみません。このお話とはまた別の件なんですけど、明日、広島での記念式典があると思うんですけど、ほかにも広島の中で原爆のことを思い出すっていう行事はありますか。

【白石】行事ですか。行事はね、ピアノを弾いたりとかね、そういうふうなのが平和公園の中であることがありますね。その年その年でやっぱりいろいろとイベントのようなのが違ってきますね。ピアノは、去年はなかったとか、今年はあるんじゃないかというふうな感じであったりするんですが、でも、平和公園の中も、私はしっかり見てほしいなと思うんです。で、供養塔、供養塔というのがね、あるんですよ。おだんごのようなお墓があるんです。あそこが私は一番、大事なところだと思います。今、平和公園の中に慰霊碑がありますね。私は、お参りするのにおばあちゃん亡くなっていますから、あそこに慰霊碑の

中に過去帳に入れてもらっています、おばあちゃんの名前もね。母の名前も入れてもらっています。だけど、私は一番にそこには行かない。供養塔に行くんです。あそこがほんとうのたくさんの人が無縁仏で入っていたりっというようなん、たくさんの人があそこに入っているんで、私は一番に供養塔に行きます。行ってって言うんじゃないのよ。うん。だけど、私はそういうふうにして、それから、慰霊碑に行きます。お参りするのがね。

だから、イベントはどうなんですかね。ちょっと今年は、私も忙しくてよく聞いてないんですが、でも、いろんなことは中ではやっていると思いますよ。

あと、灯籠流しがあつたりしますね。そういったのもね、ほんとうに皆さんがこれくらいのもので、船のようなの、つくってね、流して下さってもいいのよ。だから、普通のね、灯籠流しの何千円もするものを買って流さなくても、それでないといけないということはないからね。だから、色紙ですね、折り紙かな。それでだまし船のようなのをつくって、折ってね、それを流してもいいんですよ。だから、夜ね、灯籠流しでも行って、そんなんだったら、軽いから、それだけ持って行って流されるじゃないですか。ねえ。だから、それも供養の一つになると思うし、だから、皆さんでね、ちょっと考えてみて、うん。それは一つの案なんですけどね、灯籠流しのあれはっていうことはね。船のようなでもいいし、何でもいいじゃないですか。ねえ。それを、鶴を流してあげてもいいし、折って。それも灯籠流しになるんだからね。だから、灯籠でないといけないっていうことはないと思いますよ。

【今井】ピースボランティアというのは、

具体的にどのようなことをするんですか。

【白石】あのね、ピースボランティアは、資料館と平和公園の解説です。

令和元年8月5日(月)

YMCA 国際文化センター

《被爆者講師プロフィール》

【氏名】白石 多美子

【被爆時年齢】6歳

【被爆時の状況】

爆心地から約4kmの宇品国民学校の教室のなかで被爆しました。当時6歳でした。翌日の7日、8日、9日母と二人で祖母を探しに爆心地近くまで歩いて行きました。途中たくさんの人や馬の死体を見ました。被爆後、小学校3年生の時、高熱と下血に苦しみ1年間、日本赤十字病院に入院し、家に帰ってからも精神的に辛い思いをしました。21歳の時に結婚の話があり、被爆者とは言えませんでした。子供のことも生まれてくるまで心配でした。定年後、知人の紹介もあって、学校等で証言をしています。

6. 碑めぐり講話

日時：令和元年8月7日（水）

午前9時00分から10時40分

場所：平和記念公園内

講師：半田 修三 氏



碑めぐり講話 ルートマップ

広島市ホームページより



1. 平和記念資料館（東館）



2. 原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑)



3. 原爆供養塔



4. 韓国人原爆犠牲者慰霊碑



5. 被爆した墓石(慈仙寺跡の墓石)



6. 原爆ドーム
(元安川を挟んだ対岸から講話聴講)



7. 原爆の子の像



8. 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

6. 成果報告

各中学校・義務教育学校を代表して参加した15名の派遣生は、広島で学んだこと、感じたことを各学校・地域に伝えるため、下記のとおり報告会や発表を行いました。

東海中学校 松本 麻那

【日時・場所】令和2年2月17日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 全校生徒（357人）・保護者・小学校の先生・地域の方々

【発表の内容】①被爆者講話 ②平和記念公園・原爆ドーム見学 ③平和記念式典

④平和記念資料館見学、灯籠流し ⑤碑めぐり講話 ⑥まとめ



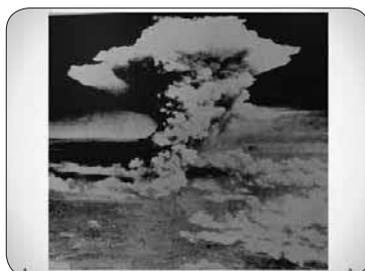
大崎中学校 久松 希

【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】学習報告会 全校生徒・保護者（約250人）

【発表の内容】平和派遣生として広島市を訪れて印象に残ったこと ①被爆者講話で受け取った言葉「学生時代を楽しんでください」について ②平和記念式典への参列「悲惨な過去を悲惨な過去のままだにしない」について ③原爆の子の像のモデルとなっている“佐々木禎子さん”について

皆さんへのお願い⇒当たり前前に生活できる幸せに感謝を忘れないでほしい。

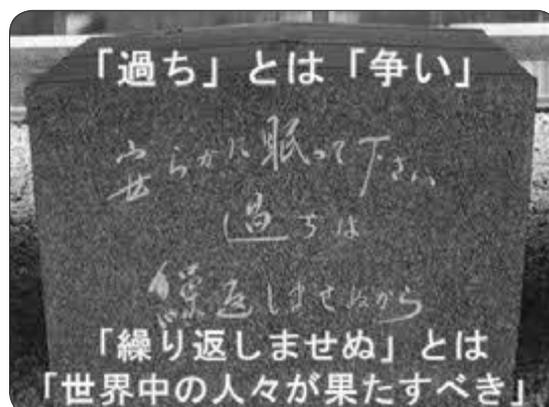


浜川中学校 飯村 更紗

【日時・場所】令和元年 10月26日 体育館

【方法・対象】学習発表会 全校生徒 302人

【発表の内容】「平和とは何か」「平和は誰が築くのか」「平和のためにできることは何か」の3つのテーマを中心として演説した。報告の最後には「平和の実現」に向けた自らの決意を表明し、「2020年開催の東京オリンピックを、日本から世界に平和を発信する最高の機会にしよう」と聴衆に呼び掛けた。



鈴ヶ森中学校 今井 恵偉人

【日時・場所】令和元年 10月26日 体育館

【方法・対象】文化祭 全校生徒 450名

【発表の内容】品川区のほぼ中央にある大井町出来に原爆が落とされたと仮定してみます。大井町駅から直線で1.6kmにある鈴ヶ森中学校は残念ながらすべて破壊されると思います。さらに、半径3km以内には八潮方面も含め品川区がほぼ含まれています。その他にも、資料館に展示してあった作品の説明をしました。ハワイにあるアリゾナ記念館に行ったことがあるので、ハワイでおきた戦争でもたくさんの尊い命が失われてしまった、どの国でもたくさんの被害がでてしまうということも説明しました。



富士見台中学校 文園 貴

【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】報告会 全生徒、保護者、地域の方等

【発表の内容】①『14万人』があらわすもの ②被爆者講話 ③平和記念式典
④袋町小学校平和資料館見学 ⑤広島平和記念資料館 ⑥灯篭流し
⑦広島平和使節派遣で学んだこと ⑧非核平和都市品川宣言朗読

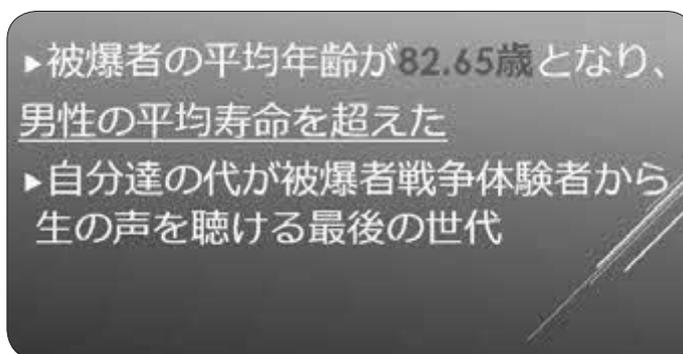


荏原第一中学校 齋藤 穂

【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 生徒・保護者・地域の方 約700人

【発表の内容】①白石多美子さん被爆者講話について
②広島平和記念式典について
③半田修三さん碑めぐり講話について



荏原第五中学校 寺谷 ディヴィン

【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】若葉祭（文化祭）の舞台発表の中での報告

全校生徒・保護者・地域の方等 約400名

【発表の内容】①原子爆弾について ②被爆者講話より ③平和記念資料館を参観して
④広島平和式典に参加して ⑤広島平和派遣で学んだことについて
⑥平和な世界を創るために



荏原第六中学校 長谷川 瑞歩

【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 全校生徒・保護者

【発表の内容】①原爆について（日付・亡くなった人の人数など） ②現在の広島市との比較
③被爆者の方（白石多美子さん）からのお話 ④白石さんが伝えてくれた3つのことに関して
⑤お話しを受けての自分の感じたこと ⑥今私たちにできること ⑦今までの話を通してのまとめ

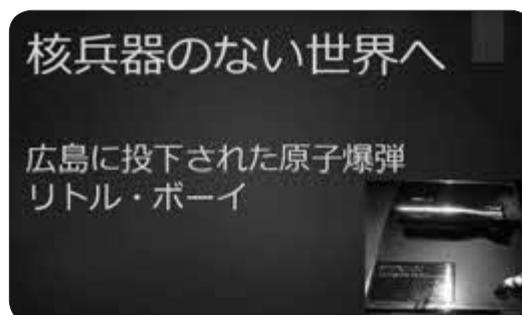


戸越台中学校 近藤 千秋

【日時・場所】令和元年10月19日 体育館

【方法・対象】学習成果発表会 全校生徒、保護者 543人

【発表の内容】①広島での生活（行動の様子など） ②被爆者の方（白石さん）の話 ③碑めぐり講話（半田さん）の話 ④平和について（1945年8月6日何が起こったか） ⑤核兵器について（リトル・ボーイなど） ⑥世界平和に向けて（自分の考え、まとめ）



日野学園 青山 快

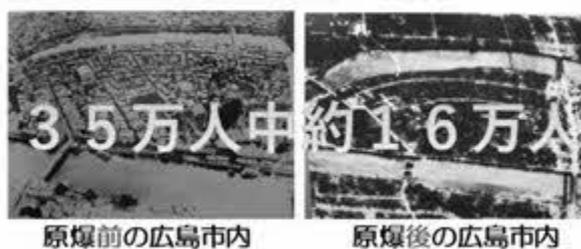
【日時・場所】令和元年10月26日 体育館

【方法・対象】報告会 児童・生徒（5～9年生）、保護者 約900人

【発表の内容】①原子爆弾 ②当時の広島の様子 ③広島平和記念公園 ④広島記念資料館 ⑤被爆者白石さんの話 ⑥袋町小学校資料館 ⑦広島記念資料館の展示品について ⑧灯籠流し ⑨平和記念公園の平和の子の像について



広島の様況や被害



伊藤学園 酒井 やえ

【日時・場所】令和元年10月25日 アリーナ

【方法・対象】報告会（学芸発表会） 児童・生徒（5～9年生）・保護者約600人

【発表の内容】①視聴覚教材（パワーポイント）を使用し、被爆者講話や平和記念式典への参列、平和記念資料館などの見学など、今回の派遣を通し学んできた内容について報告をした。

②まとめとして、「平和の誓い」について報告した。



八潮学園 古郡 朋菜

【日時・場所】令和元年10月26日 アリーナ

【方法・対象】報告会 児童・生徒（5～9年生）443人

【発表の内容】①被爆者講話（白石さんの言葉など） ②広島街並み ③平和記念式典（子ども代表の言葉など） ④広島平和記念資料館（遺品など） ⑤灯ろう流し ⑥碑めぐり講話（原爆の子の像・被爆当時の地面など） ⑦原爆の恐ろしさ・平和が続くために私たちが出来ること

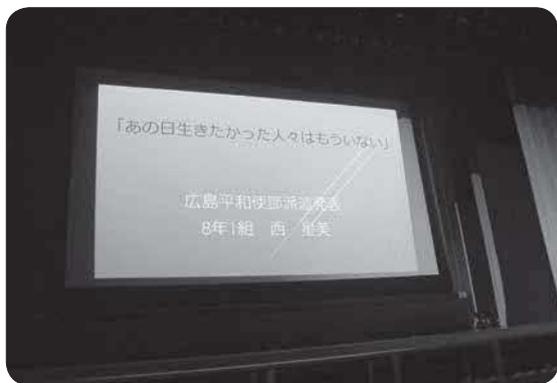


荏原平塚学園 西 星美

【日時・場所】令和元年10月26日 アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会 児童・生徒・保護者 約400人

【発表の内容】日常は当たり前ではない。毎日を大切に楽しく生きる。今を楽しむ。命に感謝する。平和について一人一人が考えて、自分に何が出来るか考えてほしいです。原爆によって、生きてくても生きられなかった方々が大勢いることを知ってください。



品川学園 鈴木 琉菜

【日時・場所】令和元年10月26日 アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会 児童・生徒（5～9年生） 約600人

【発表の内容】①現在の広島の様子について ②原爆資料館について ③平和使節派遣についての感想・今回の派遣を通じて伝えたいこと



豊葉の杜学園 清田 李桃音

【日時・場所】令和元年10月26日 アリーナ

【方法・対象】学習成果発表会 児童・生徒5～9年生・保護者・地域住民 約1000人

【発表の内容】①被爆者の白石さんの体験・メッセージ ②黒焦げになったお弁当と派遣生が笑顔で食べている写真の比較 ③放射能による被害 ④爆風の威力 ⑤熱線による被害 ⑥現在の核保有国について ⑦広島の人々が行っていること（講話・碑めぐりのボランティア、灯籠流し、平和記念式典）⑧原爆死没者慰霊碑の碑文、昨年の平和記念式典での平和の誓い（抜粋）の紹介 ⑨自身の思い



< 8月6日（2日目）「灯ろう流し」灯ろうに書いた派遣生のメッセージ >

